横　山　遺　跡

1 9 8 7

長 岡 市 教 育 委 員 会

序

この調査報告書は国・県の補助を受けて実施した長岡市東部の桂町に所在する「横山遺跡」の発掘調査記録である。

横山遺跡は弥生時代後期の集落跡で、以前から土器や玉類が採集されていた。

今回の発掘調査でも住居跡や多数の土器・玉類等が見つかり、中でも現在のところ日本海側最北端の環濠集落が確認されたことは今後の研究を進めていく上で貴重な成果であった。

この記録が地域の文化財に対する理解と認識を深め、また学術研究のために活用され役立つことを願っております。

なお、今回の調査にあたり多大な御指導、御助言を頂いた文化庁・新潟県教育委員会をはじめ関係各位に対し、心からお礼を申し上げます。

昭和62年3月

長岡市教育委員会
教育長　丸　山　　博

例　　言

1．本書は新潟県長岡市桂町字横山にある弥生時代の横山遺跡発掘調査の記録である。

2．発掘調査は国・県から補助金の交付を受けて、長岡市教育委員会が調査主体となって実施した。調査期間は昭和61年7月30日から9月17日までである。

3．遺跡・遺構の写真撮影・測量は調査従事者全員があたり、桑原陽一・小林隆幸・山川史子（以上新潟大学学生）の協力があった。

4．遺物・図面の整理及び出土品の実測・拓本・トレースから図版の作成は駒形、冨田、小熊、川崎の調査者に、岩崎均・小林隆幸・山川史子（以上新潟大学学生）を加えたスタッフで行った。

5．本書は駒形、冨田、小熊、岩崎、川崎、小林(隆)、山川が検討を重ねたものを、次のように分担して執筆したもので、駒形が全体をまとめた。
Ⅰ・Ⅲ－1・2・Ⅳ－4・Ⅴ＝駒形、Ⅱ＝川崎・駒形、Ⅲ－3・Ⅳ－5～7＝小熊、
Ⅳ－1～3＝冨田・岩崎、Ⅳ－5(石器)＝小林

6．挿図の内、断面図脇の数字は、単位メートルの標高を示す。また、土器の実測図で、網がかっている範囲は朱彩されていることを示す。

7．発掘調査から本書の作成まで、次の方々や機関をはじめ、多くの方々から御指導・御協力を賜った。ここに心からお礼を申し上げる次第である。（五十音順・敬称略）
甘粕　健　石原正敏　小野　昭　金子拓男　神林昭一　品田高志　関　雅之　田中耕作
寺崎裕助　寺村光晴　田海義正　戸根与八郎　中島栄一　前山精明　山口栄一
横山勝栄　和田寿久　桂町町内会　桂町農家組合　横山畑作組合

目　　次

Ⅰ．はじめに……1

Ⅱ．環　　境……2

Ⅲ．調査の概要……4
　1．調査の経過……4
　2．調査区の設定……4
　3．土　層　序……4

Ⅳ．遺構と遺物……7
　1．第1号住居跡……7
　2．第2号住居跡……10
　3．第3号住居跡……12
　4．第4号住居跡……15
　5．環　　濠……16
　6．方形周溝……24
　7．土　　坑……25

Ⅴ．まとめ……29

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図……3
第２図　遺跡周辺の地形およびグリット図……5
第３図　土層断面図……6
第４図　遺構全体図……6・7
第５図　第１号住居跡実測図……7
第６図　第１号住居跡出土遺物……9
第７図　第２号住居跡実測図……10
第８図　第２号住居跡出土遺物……11
第９図　第３号住居跡実測図……12
第10図　第３号住居跡出土遺物……14
第11図　第４号住居跡実測図……15
第12図　環濠内遺物出土状況図……17
第13図　環濠部分実測図……18
第14図　環濠土層断面図……19
第15図　環濠出土遺物(1)……21
第16図　環濠出土遺物(2)……22
第17図　環濠出土遺物(3)……23
第18図　方形周溝実測図……24
第19図　土坑出土土器……25
第20図　方形周溝出土遺物……26
第21図　東日本における弥生後期の環濠をもつ集落分布図……27

図　版　目　次

図版第１図　遺　　跡
図版第２図　調査風景
図版第３図　遺跡（航空写真）
図版第４図　第１号住居跡
図版第５図　第２・４号住居跡
図版第６図　第３号住居跡
図版第７図　第１号環濠
図版第８図　第２・３号環濠・方形周溝

Ⅰ．はじめに

横山遺跡の発見は「先史時代と長岡の遺跡」（中村孝三郎　1966）によれば、戦後加津保町の神林高雄氏によるとされている。そして、昭和23年４月には中村氏を中心に神林高雄・神林昭一氏等が試掘を行い、新潟県の弥生後期を代表する器台・甕・壺などを発掘された。

ところで、この横山は戦前に開通した長岡・栃尾間の「栃尾鉄道」の敷設工事で、丘の西側の大半が削られた。また、横山の西に広がる沖積地は「八丁沖」と呼ばれる低湿地で、この八丁沖の水田への客土として、さらには民家建設の際に壁材として、戦後になっても横山の丘は土砂の補給源として序々に削り取られていった。

中村氏の「先史時代と長岡の遺跡」では昭和30年代後半から40年にかけてと思われる頃の横山の状況を、南北の長さ150ｍ、東西の幅80ｍの「楕円構造を呈していて」……西側は信濃川の水流と電鉄工事で「削岸した急崖となり」と伝えられている。そして、昭和48年の遺跡カードによれば、遺跡の範囲は「南北50ｍ、東西40ｍ」となっている。これはこの10年間の土砂採掘の激しさを物語っていよう。その後も横山の丘はこれほどではないにしても、少しずつ削られていった。この事態を憂慮した長岡市教育委員会は、昭和60年４月に試掘調査を実施して、遺跡の内容や遺跡の残存範囲などの把握につとめた。

この試掘調査で横山の残存面積が約1500㎡であることと、横山が日本海側最北端に位置すると思われる環濠集落であることがわかった（駒形・岩崎　1986）。これを受けて、昭和61年度に国・県の補助金の交付を受けて、遺跡の内容をより詳細につかむことを目的に発掘調査を実施することになり、昭和61年７月30日から９月17日の間に発掘を行った。

なお、発掘調査は次の体制で行った。

調査主体　長岡市教育委員会（教育長　丸山　博）

調査担当者　駒形敏朗（長岡市教育委員会）

調査補助員　小林義広（昭和61年８月１日～９月30日）

調査協力者　小熊博史（新潟大学研究生）・冨田和気夫・川崎裕美・広野耕造（以上、新潟大学学生）

調査事務局　田中　岬（長岡市教育委員会　社会教育課長）
清水正一（同課課長補佐）・鈴木孝行（同課庶務係長）
芳賀代志榮・松田英也（同課庶務係）

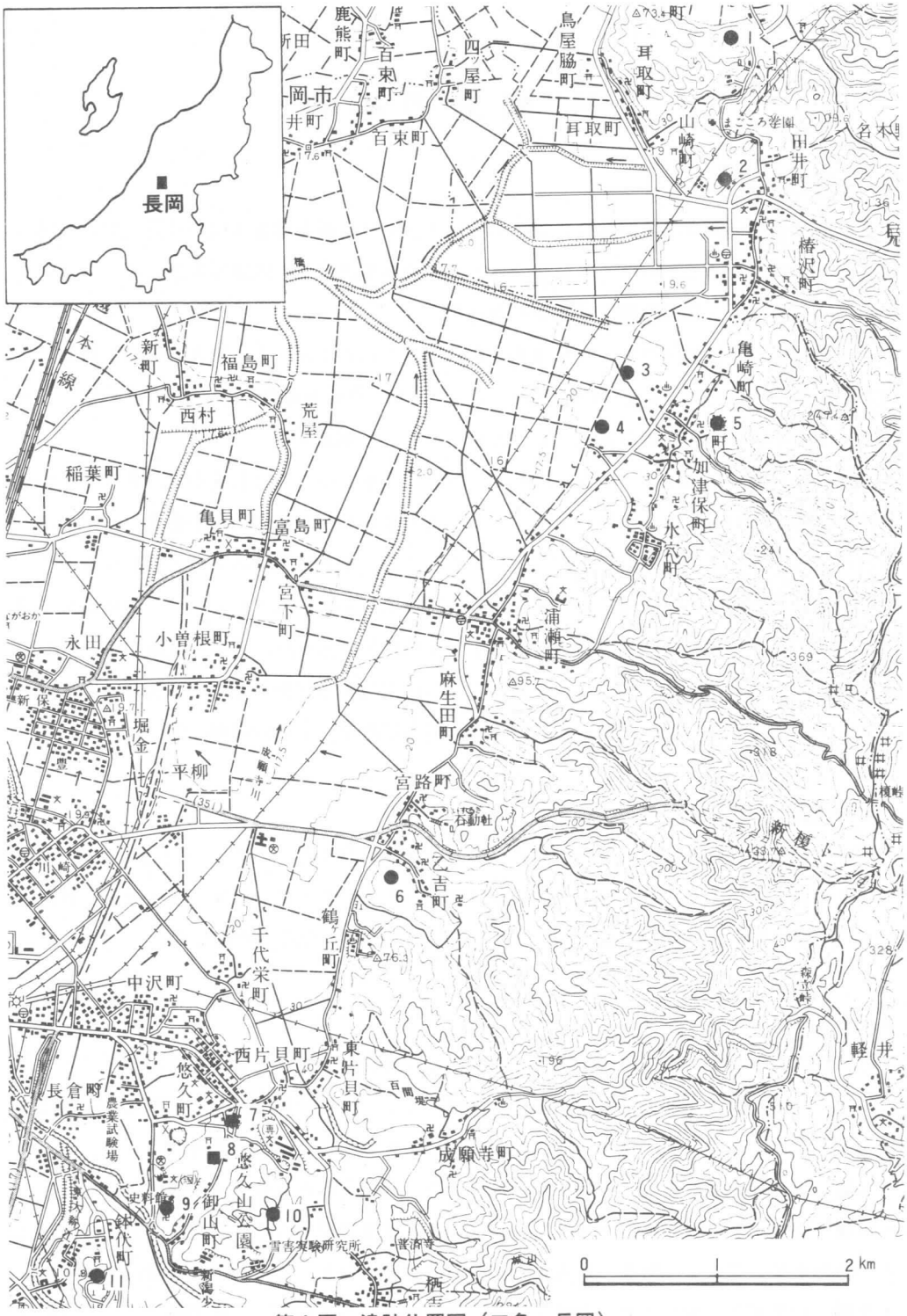
II．環　　境

新潟県のほぼ中央部に位置する長岡市は、中央に信濃川が北流し、東西には丘陵が連なっている。信濃川は東頸城丘陵などの山あいを流れていたのを、ここ長岡市に入る手前から新潟平野に顔を出しはじめ、それまでの沿岸の風景を一変させた。また、東西に連なる丘陵は、東では南の魚沼丘陵につづく山地で通称「東山丘陵」、西の山地は東頸城丘陵につづく山地の通称「西山丘陵」と呼ばれ、市民に親しまれている。そして、この丘陵は長岡市と他市町村との市境界の分水嶺をなして東では森立峠や榎峠などで栃尾市と、西では曽地峠や薬師峠で柏崎市や西山町・刈羽村と通じている。

この信濃川と東西の丘陵にはさまれたところで、沖積地から山地に続くところの地理的な様相は東西でかなり異っていると思われる。西では信濃川の河岸段丘が数面発達していること、信濃川と合流する渋海川・黒川などの河川が、段丘を横切っていないことなどが特色のひとつに含まれると思われ、東では河岸段丘の発達はみられず、太田川・栖吉川・柿川などの河川が東山丘陵に源を発し、その東山丘陵を寸断するように丘陵の尾根線と直交するような形で、西の沖積地へ流れ落ちている。そして、沖積地と丘陵の接点には谷口扇状地をつくっていることが多い。と思われるほど、河岸段丘の有無によって地形が異っている。

昭和60年の試掘調査（駒形・岩崎　1986）で弥生後期の環濠集落と判明し、今回調査を行った横山遺跡は、東山丘陵に近い長岡市の東の地域にある。横山は東山丘陵から沖積地の水田に出たところで、島状に浮ぶ丘そのものが遺跡である。だが、遺跡の大半は戦前の鉄道敷設・戦後の土砂採取で削り取られた。横山の丘の周囲は沖積地の水田が広がっている。西は長岡でも有数な湿地帯であった八丁沖が広がっている。東には桂町と加津保町との間の沢からと思われる土砂が沢に近い方が高く、北へ傾斜して堆積している。おそらく、ここも谷口扇状地の一部であると思われる。

この横山と同じ東山丘陵沿いにある弥生時代の遺跡は、高稲場・桂沢（仮称）・岩村など、東山丘陵の西向き斜面の裾の方に立地する場合と、堅正寺・前山など悠久山の裾に立地することが多いように思われる。この中にあって横山や、横山のすぐ南隣りの原山のように、東山丘陵から沖積地に出たところの丘の上にある遺跡は若干、立地の条件が異っていると言えよう。横山・原山ともに環濠集落の推測がなされているだけに、立地にも違いがでているのであろうか。この外にもこの地域では環濠集落と考えられている見附市大平城跡遺跡があるが、大平城跡は第1図にある遺跡よりはかなり高いところにある。環濠集落云々の検討も充分になされなければならない遺跡と思われる。また、最近、長岡市と見附市との境界線の東山丘陵で、古墳の存在が伝えられている。横山の次の時代として興味深いものがある。



第1図　遺跡位置図（三条・長岡）

1．岩沢　2．高稲場　**3．横山**　4．原山　5．桂沢(仮称)
6．岩村　7．戸左衛門　8．蒼柴神社裏　9．堅正寺
10．前山　11．鉢が峰

Ⅲ．調 査 の 概 要

1．調査の経過

横山遺跡の発掘調査は7月30日に開始する。それまでに調査用基本杭の打設、プレハブの設置等の準備を行っておいた。本調査の目的は環濠集落の規模・内容等をさぐることで、住居跡や環濠のプラン検出を第1に調査を進めた。

8月中旬には、住居跡が丘の上で南北に3基並んでいること、Ⅰ～ⅣAの環濠はⅡAで分岐する2本の環濠であること、ⅤBでは丘の上で2本の環濠が直交していること、そしてⅡ・ⅢAにまたがって方形周溝があることなどをプランから確認する。

遺構内の発掘は、検出した時から始めていたが、環濠についてはお盆明けの8月下旬から本格的に着手する。発掘を開始して間もなく、第1号環濠の上面に土器が密集していることがわかり、土器の分布図を$\frac{1}{10}$で作成しはじめる。また、第1号環濠の入口と思われるステップも9月初めには確認・発掘する。9月10日には遺構の発掘がほとんど終り、写真撮影・測量に着手するが、第3号住居跡の床下に第4号住居跡が検出され、直ちに発掘する。そして、9月16日に全ての調査が終り、17日に遺物とともに旧三和分庁舎の整理室へ引越しする。

また、調査中の8月24・29日の両日に「一日考古学教室」を横山遺跡で開く。

2．調査区の設定（第2図）

調査区は20×20mを大グリットとして、原点を南東に設ける。大グリットを2×2mに細分して小グリットとする。名称を大グリットは原点から北へⅠ・Ⅱ……Ⅴ、西へはA・B、小は北へ1・2……10、西へはa・b……Jとし、ⅡA－5eなどと呼称した。

3．土層序（第3図）

遺跡で確認された大別層序は以下の通りである（性状の詳細は土層注記を参照のこと）。

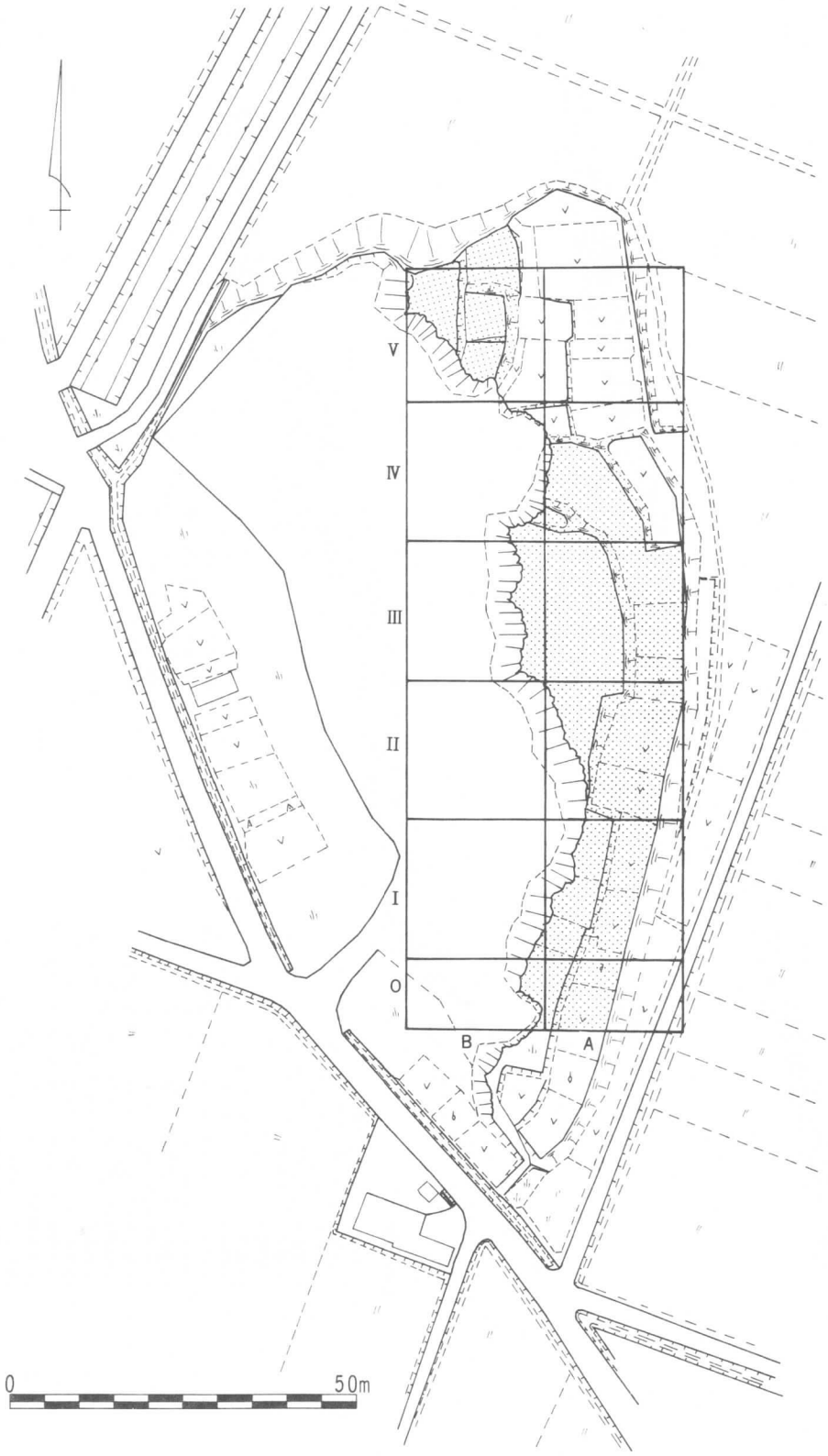
・**Ⅰ層**　現表土および畑地造営時の盛土。上層（1a）は現耕作土だが、下層（1b）は畑地の段を形成するための、昭和初期に地山を削平して盛土した部分である。

・**Ⅱ層**　黒褐色土層。1aに比べやや黒味を帯び、若干遺物を包含するが層厚は薄い。

・**Ⅲ層**　褐色土層。遺跡東域を中心に約30～40cmの層厚で認められ、勾配に合致した流れ込みの様相を呈している。ⅢA～ⅣA区の上層部（3a・3b）では遺物を多量に包含する。

・**Ⅳ層**　暗黄褐色～黄色土層。遺構（環濠・方形周溝）の下部層で、細別層によっては地山粒・ブロックの混入が多く、粘性もⅢ層に比較して強い。遺物は少量の出土にとどまった。

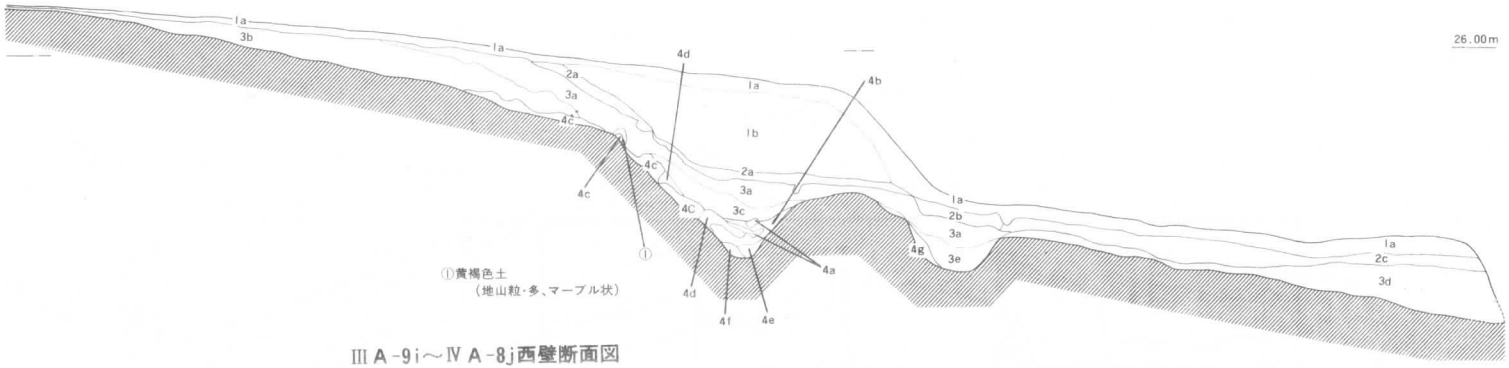
・**Ⅴ層**　地山粘土層。上層・下層で性状は異なり、遺構は上層部内に構築されている。



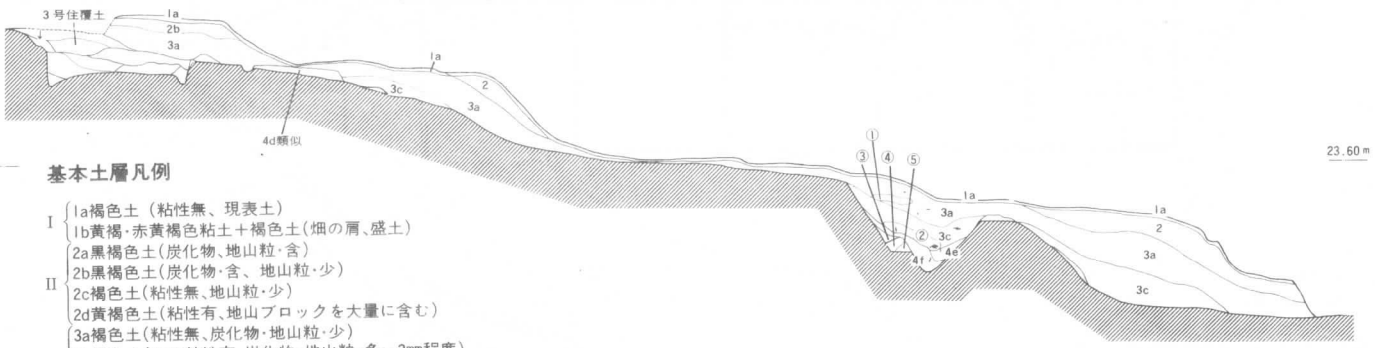
第２図　遺跡周辺の地形およびグリット図

第3図　土層断面図

II A-10a～j北壁断面図



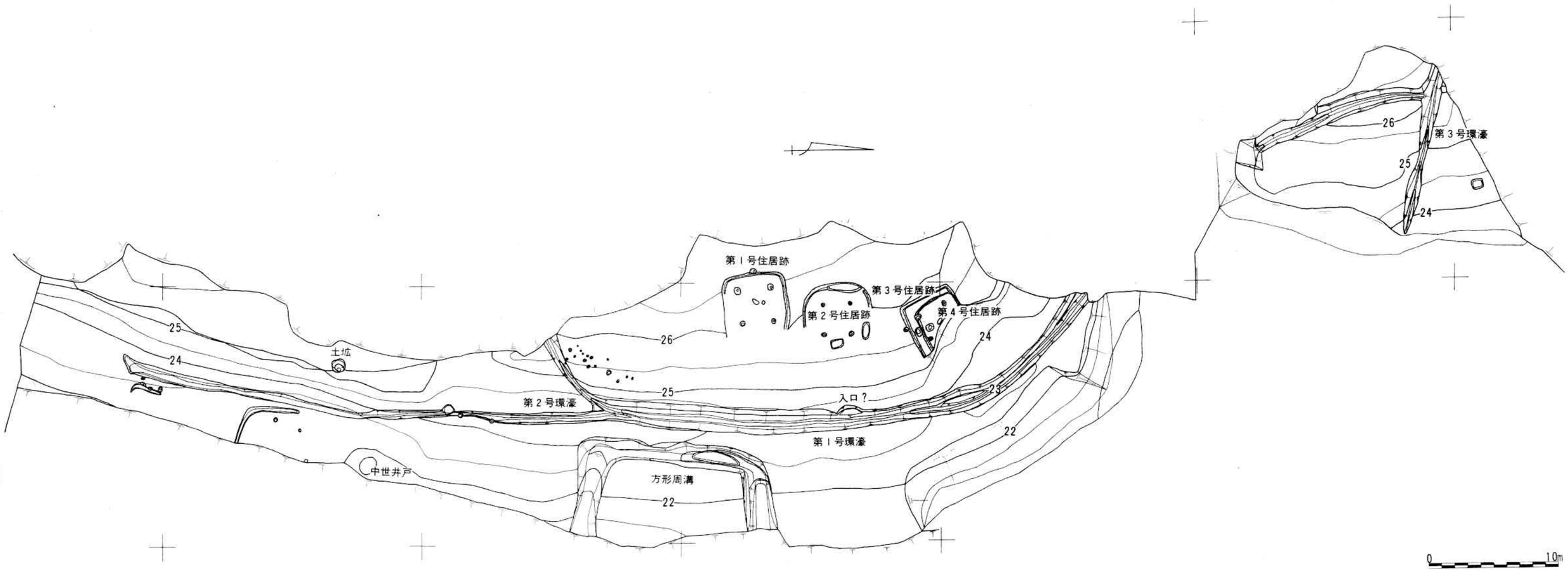
III A-9i～IV A-8j西壁断面図



基本土層凡例

- I
  - 1a褐色土（粘性無、現表土）
  - 1b黄褐・赤黄褐色粘土＋褐色土(畑の肩、盛土)
- II
  - 2a黒褐色土(炭化物、地山粒・含)
  - 2b黒褐色土(炭化物・含、地山粒・少)
  - 2c褐色土(粘性無、地山粒・少)
  - 2d黄褐色土(粘性有、地山ブロックを大量に含む)
- III
  - 3a褐色土(粘性無、炭化物・地山粒・少)
  - 3b褐色土(やや粘性有、炭化物・地山粒・多～3mm程度)
  - 3c褐色土(やや粘性有、炭化物・地山粒・多～10mm程度)
  - 3d褐色土(やや粘性有、炭化物・含、地山粒・極少)
  - 3e褐色土(やや粘性有、炭化物・地山粒・少)
  - 3f黒褐色土(粘性無、炭化物多、地山粒・少)
- IV
  - 4a青灰色粘土(粘性有、炭化物・地山粒・含、斑鉄・多)
  - 4b暗黄褐色土(粘性有、炭化物・少、地山粒・多)
  - 4c黄褐色土(粘性有、炭化物・含、地山粒・下部ほど多)
  - 4d黄色土(粘性、強、炭化物・極少、地山ブロック)
  - 4e暗黄褐色土(粘性有、炭火物・地山粒・多～20mm程度)
  - 4f暗黄褐色土(粘性有、炭化物・含、地山粒・少)
  - 4g黄褐色土(炭火物・少、地山粒・多)
- V
  - 5a黄色粘土(粘性強、均一な粘土、地山上層)
  - 5b赤黄・白黄色粘土(粘性強、礫を多量に含みマーブル状、地山下層)

①黄褐色土(ブロック状)
②赤暗褐色土(3c層下部、多量の焼土を含む)
③明黄褐色土(褐色土粒・含5a崩落土・含む)
④暗黄褐色土(地山粒＝5b・少)
⑤明黄褐色土(地山粒＝5b・多)


第１号住居跡
第２号住居跡
第３号住居跡
第４号住居跡
第３号環濠
第２号環濠
第１号環濠
入口？
土坑
中世井戸
方形周溝
26
25
24
23
22
0
10m

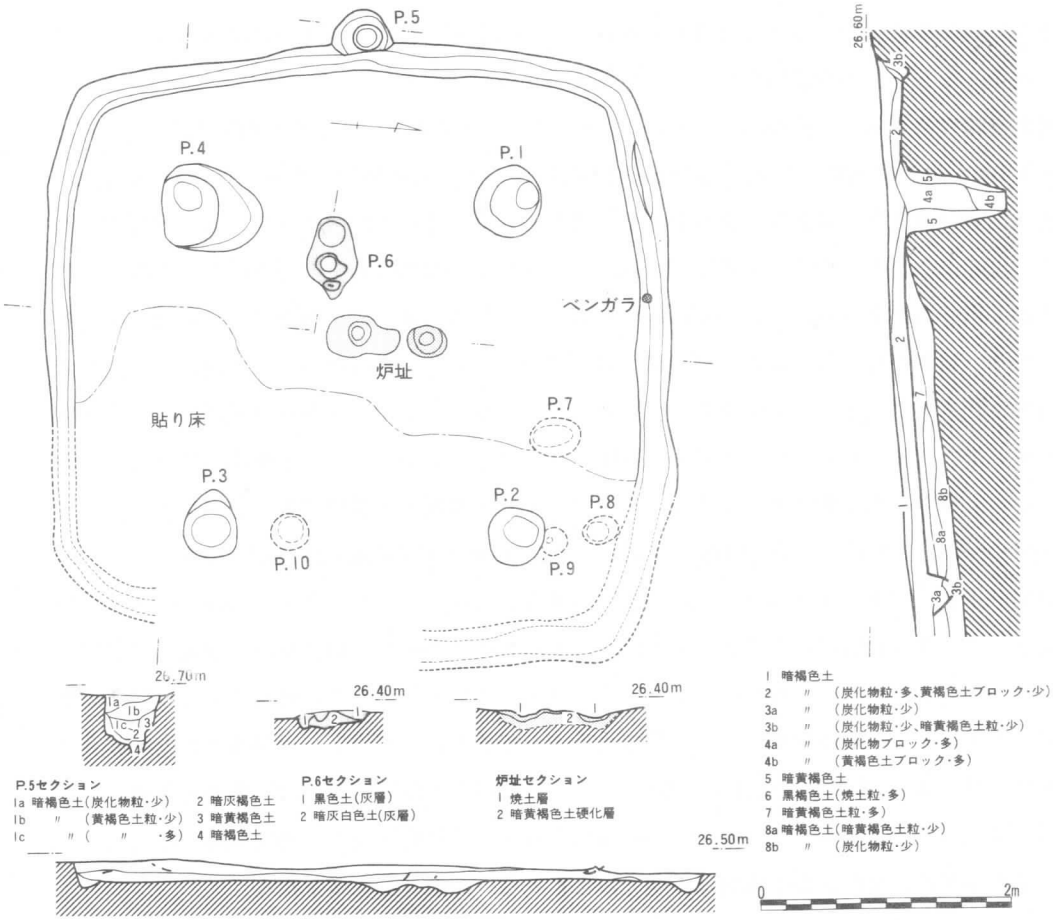
第４図　遺構全体図

Ⅳ. 遺構と遺物

今回の調査で確認した主な遺構は、台地上平端面縁辺部の住居跡群や土坑、それを取り囲むように台地斜面直下を巡る新旧の環濠、さらに外側の緩斜面に営まれた方形周溝などである。以下、遺構ごとにその構造、出土遺物について概要を報告する。

1．第1号住居跡（図版第4図　第5・6図）

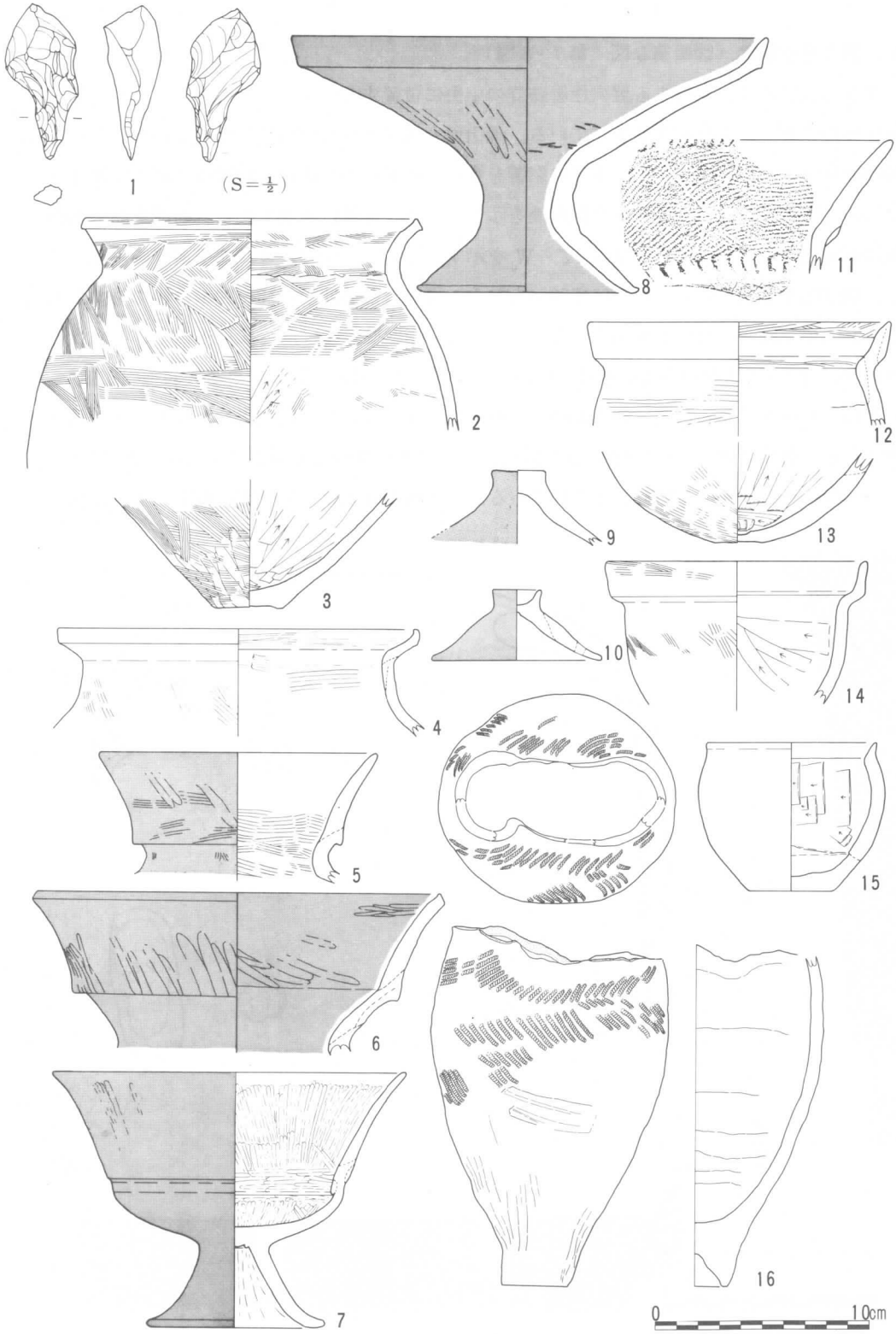
第1号住居跡は、今回検出された竪穴住居跡群の南端に位置する。プランは地山面を露呈させた段階で西半部を確認した。東半部は西半部の調査が床面まで達した後、その延長を追うことでプラン限界を把握した。住居内の堆積土は厚さ25cm以下で、東側ほど削平のため薄くなるが、堆積状況は自然埋没を示していた。プランは隅丸方形で南北5.0m、東西推定5.0mを計り、周溝を除く床面積は約18m²と推定される。軸線はN－5°－Wを取る。



第5図　第1号住居跡実測図

遺存した壁面は西壁で24cmを計り、東側ほど削平のため低くなる。壁面下を巡る周溝は幅15～20cm、深さ5～18cmで、東壁下では一部未検出だが、本来全周するものと思われる。床面は西半部では地山整地面を直接床面とするが、東半部では地山上の黒褐色土層を整地した上に暗黄褐色土で貼床を施している。床面は全面硬く踏み固められ、西半部は特に硬質である。炉は床面の中央やや西側に位置し、59×34cmの不整長円形と32×26cmの長円形の2つが南北に並んで検出された。共に深さ5～9cmのすり鉢状の凹みを有し、焼土層とその下の硬化層は厚さ10～13cmに及ぶ。また、炉の西側に近接する41×55×15cmのP6は炭化物粒を含む灰層を充満しており、炉から排出される灰の一時的な処理に使われていたと思われる。柱穴は深さ80cm前後で掘方を持つP1～P4が主柱穴で、径15～20cmの粘土化した柱痕が観察された。主柱穴間の距離は約2.7mを計る。P5は深さ45cmで、2段掘りである。西壁ライン上中央部に位置するため、棟持柱的な支柱穴と考えられるが、東壁側では同様のピットは検出されなかった。なお、貼床下の黒色土中でP7～P10が確認された。遺物は住居跡の西半部、特に中央部から北西部にかけての覆土中から、多量の土器と若干の石器が出土した。床面密着ないし床面直上から出土した遺物もあるが、大部分が住居の埋没途上で流入したものと思われる。なお北壁の周溝覆土からベンガラ塊が出土している。

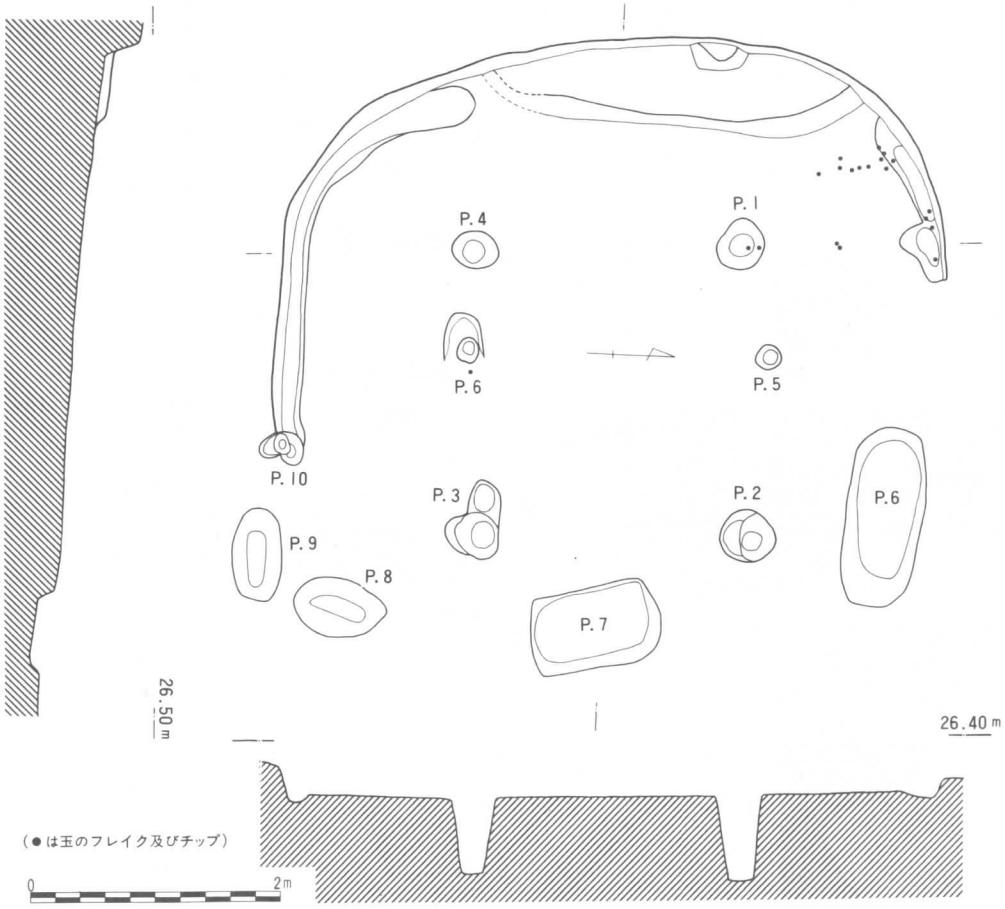
出土遺物（第6図）　石器は、若干のフレイクの他、床面直上から1の石鏃が出土している。長3.1cmを計る有柄型である。土器は延べ約60個体（小片を含め重複を考慮しない）が出土し、組成内容は甕4割、壺2割、高坏2割弱、鉢約1割で、残り1割強は器台、蓋、台付壺（小片）などがこれを占める。甕は2のような「く」の字口縁の端部に面を取るタイプが主流で、甕の約7割を占める。他には「く」の字口縁で端部を丸くおさめるもの、無文の短い有段口縁などがあり、特異な例として4の受け口状口縁を持つ例がある。外面はハケ、内面はヘラナデで調整されるものが多く、底部はすべて平底である。壺はほとんどが有段口縁で、5のタイプが多いが、大型の6も出土している。高坏は7のタイプが多く、坏部形態は北陸特有のものである。器台は出土数が著しく少ないが、完形の8は類例が本遺跡で既に2例出土している（中村　1967）（駒形・岩崎　1986）。鉢は短い直立気味の有段口縁を持つ12・13タイプと、口縁部を小さくつまみ出す14タイプがある。いずれも外面にハケ及びナデ、内面にヘラナデが施される。9・10に示した蓋は、いずれもつまみ付きの笠形で、10は裾部に通気孔が設けられている。なお、高坏、器台、蓋はヘラミガキのうえ朱彩されるのが普通である。以上に概観した土器は、全体の様相としては環濠出土の土器と近似しているが、環濠で出土するタタキ目を持つ甕は、第1号住居跡では皆無に近い。また第1号住居跡からは、撚糸文を施した土器が数点出土している。11は壺（？）の口縁部で有段風の形態を持つ。16は床面下から出土した異形土器で、類例がなく出自は不明である。今後の課題として残される。



第6図　第1号住居跡出土遺物

2．第2号住居跡（図版第5図　第7・8図）

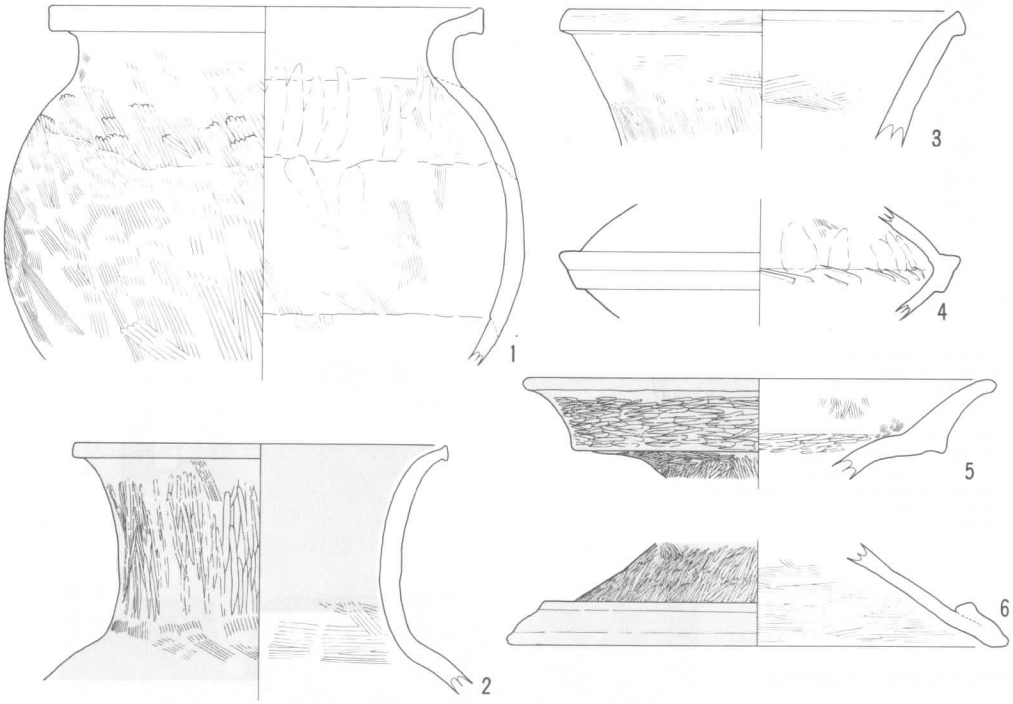
第2号住居跡は、並列する竪穴住居跡群の中央に位置する。プランは隅丸方形だが、第1号住居跡に比べ、より丸味を帯びている。地山面を露呈させた段階でプランを検出した。遺構内堆積土は耕作による攪乱・削平の影響を受け、西側約$\frac{1}{4}$の範囲に約30cmの厚さで遺存したのみであったが、堆積状況は自然埋没を示していた。規模は南北5.33m、周溝を除く床面積は推定約24m²であり、軸線はN－2°－W を示す。壁面は、西壁、及び北壁南壁の一部を残し、他は削平されていた。西壁は高30cmを計る。周溝は壁面に沿い15～20cmの幅で確認されたが、東半は削平のためか検出できなかった。また西壁壁際の一部も未検出だが、これはこの部分に設けられた棚状施設の影響と思われる。棚状施設は南北2.85×東西0.63m、床面からの高13～15cmを計り、西側に42×22cmの方形の小壇を付設した、暗黄褐色土盛土による構築物である。壁際に棚状の構築物を設ける例として、三条市狐崎遺跡第2号住居跡があげられ、「ベッド状遺構」（金子　1981）とされているが、本例とは規模、形態等に相違が認められる。



第7図　第2号住居跡実測図

次に床面は西側$\frac{1}{4}$、棚状遺構の周囲で検出されたが、地山整地面を直接床面としており、硬質であった。他の部分では攪乱・削平が著しく、炉跡すら検出されなかった。ピットはP.1～P.10まで確認された。このうちP.1～P.4は主柱穴と思われ、いずれも深さ60～70cmで掘方を有する。P.5・P.6は深さ30～40cmで支柱の柱穴であろう。P.7・P.8は深さ15～20cmだが、これは削平により浅くなったものであり、本来は40～50cmの深さを持つ貯蔵穴であったと推定される。遺物は削平をまぬがれた西半部の覆土中より少量ながら土器・石片が出土している。特に住居跡北西隅に集中する石片の出土は注目され、大半がチップで玉未製品等は含まないが、本住居跡での玉製作の可能性を示唆するものである。

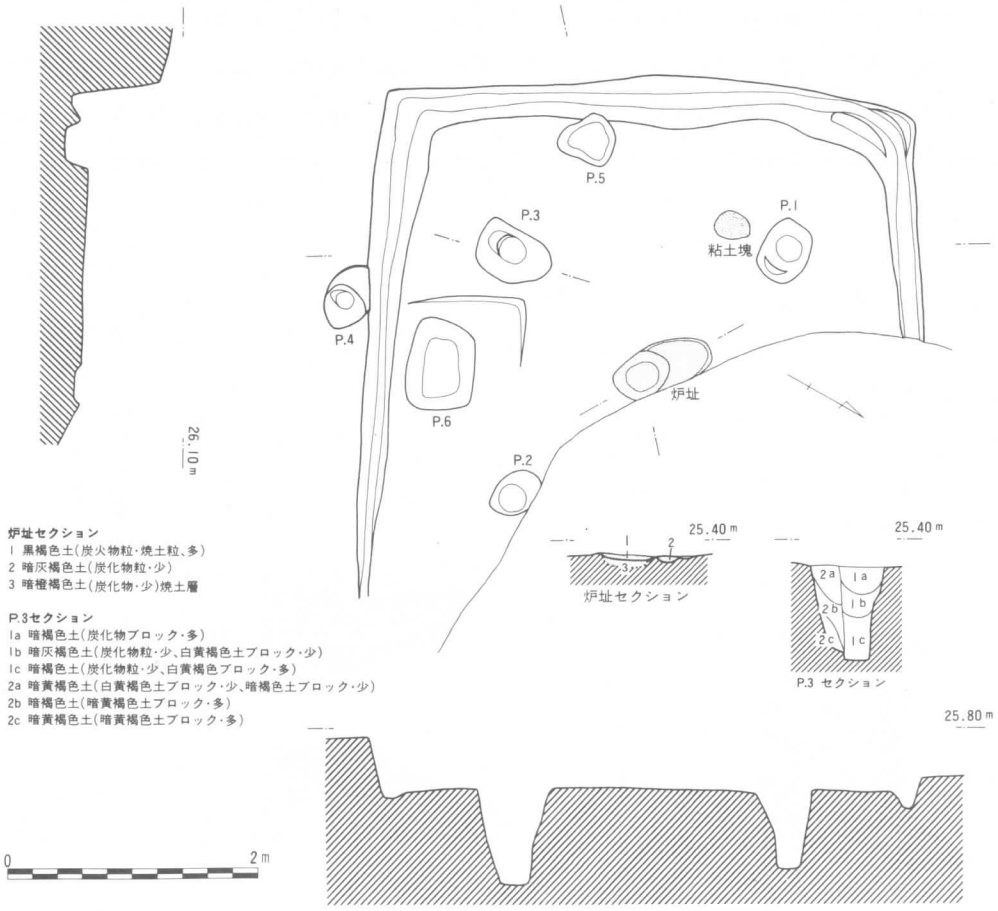
出土遺物（第8図）　第2号住居跡からは、延べ約30個体の土器が出土している。このうち約20個体を甕が占め、他に壺、長頸壺、細頸壺、高坏、器台、鉢、蓋などがある。甕は1のような「く」の字口縁面取りのタイプが優勢である。壺はわずかに3の単口縁壺が出土するに過ぎず、有段口縁壺は皆無である。この長頸壺、4の細頸壺は本住居跡に特徴的で、いずれも外面ヘラミガキで仕上げる。5は重厚な作りの器台器受部、6は端部を外側に折り返して肥厚させた、棒状脚を持つと思われる高坏の脚部下半で、共にかなり大型で丁寧なヘラミガキを外面に施す。これらの土器は、組成、器形両面で本調査他地区の出土土器との相違点が多く、全体の様相としては西山町内越遺跡出土土器（坂井　1983）に近似している。2～6は同遺跡に類例を求めることができ、編年上ほぼ同列に置いて大過ないと思われる。



第8図　第2号住居跡出土遺物　0　10cm

第３号住居跡（図版第６図　第９・10図）

第３号住居跡は、並列する竪穴住居跡群の北端に位置し、北へ向かう緩斜面上に占地する。プランは方形で他の住居跡と異なる。地山面を露呈させた段階でプランを検出したが、住居跡の北東$\frac{1}{2}$近くが斜面の耕地化のため破壊されていた。遺構内堆積土は、40～70㎝と厚く、堆積状況は自然埋没を示していた。規模は南北4.44ｍ、推定床面積約15㎡で、軸線はN－19°－Wを取る。壁面は、レベルが高い南側の隅で最も高く、周溝底より73.3㎝を計り、北側ほど低くなっている。壁面下には周溝が巡り、南側から南西壁にかけて幅30㎝、深さ15㎝前後、北西壁、南東壁でも幅10㎝、深さ10～15㎝の規模を持つ。床面は黄褐色粘土層による貼床が施され、検出した全面が硬く踏み固められていた。炉跡は床面のほぼ中央に81×40㎝の規模で検出され、径45×35㎝、深さ６㎝の円形ピットを有していた。このピット内面で厚さ約６㎝の焼土が確認されている。ピットはP.１～P.６が検出され、このうち深さ63～75㎝で掘方を有するP.１～P.３は主柱穴と考えられる。なおP.１～P.３では径約20㎝の粘土化した柱

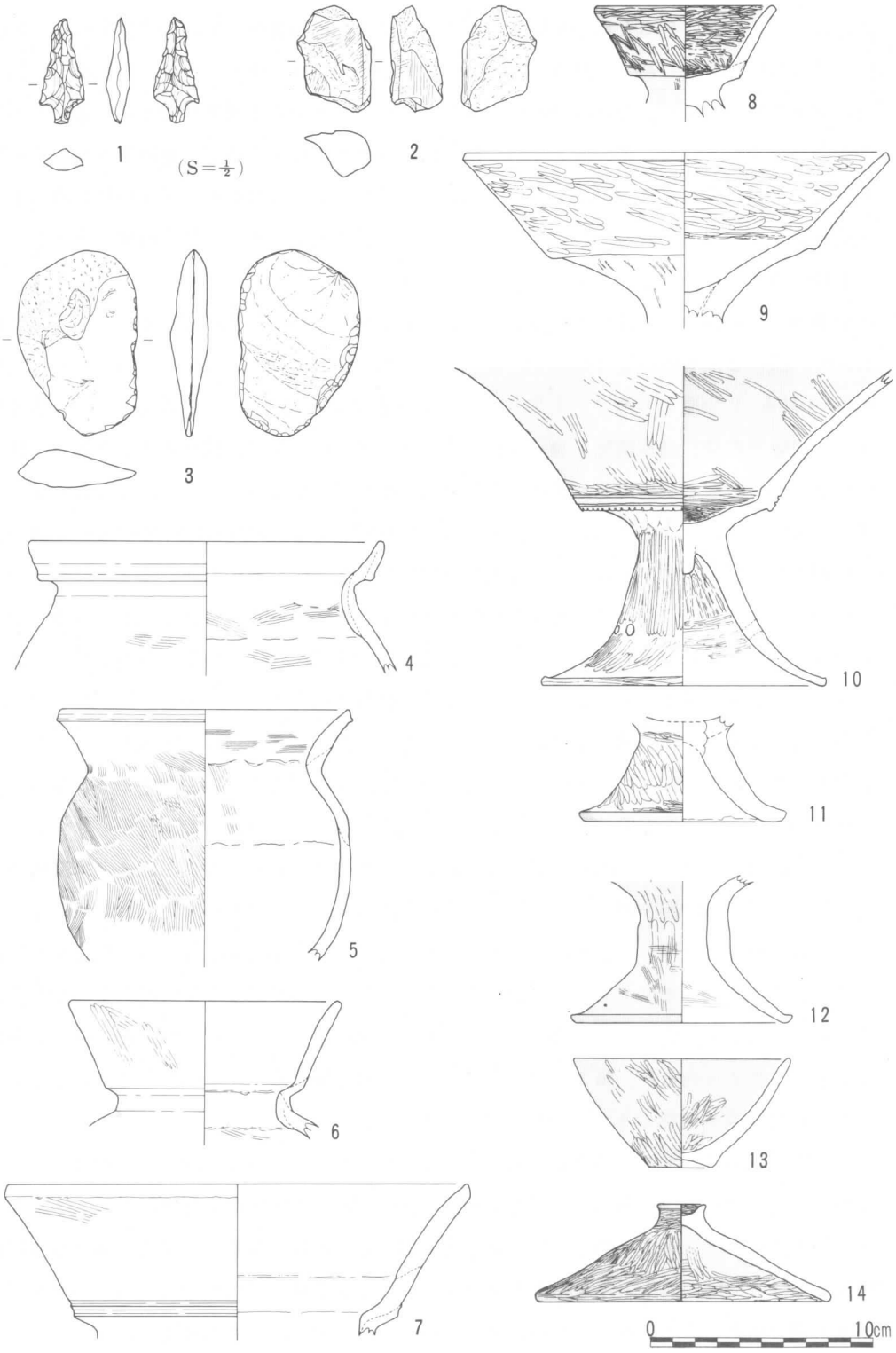


第９図　第３号住居跡実測図

痕が観察された。P.3に対置する柱穴は削平のため消失していた。P. 4は棟持柱の柱穴とも考えられるが、P. 1～P. 3と異なり掘方を有さないこと、中軸線からずれて位置することから、柱穴ではない可能性も高い。P. 5、P. 6は貯蔵穴と考えられ、それぞれ46×43×20㎝、74×54×30㎝の規模を持つ。遺物は住居跡の全体に渡り、上層から下層まで多量の土器片と若干の石器が混入していた。床面直上ないし密着出土した土器片もあるが、原位置を保っていたものはなく、大半の遺物が埋没途上で流入したと思われる。なおP. 6覆土及びP. 6周辺部の住居跡覆土中からは小鉄片の出土があったことは注目される。また、P. 1南側の床面上には粘土塊が遺存していた。

出土遺物（第10図）　第3号住居跡からは、少量ながら石器が出土している。1は石鏃で長4.9㎝を計る。2は磨製石斧の破片である、3は剥片に片面から刃をつけたスクレイパーで、長8.4㎝を計る。この他若干のフレイク・チップ及び砥石片が出土した。土器は延べ約60個体出土し、組成内容は、甕5割強、壺、高坏、蓋がそれぞれ約1割で、残り約2割を器台、鉢、台付壺（小片）などが占める。甕は他の住居跡と同じく、5に示す「く」の字口縁面取りタイプが多い。4は折り返しにより口縁を有段化した例である。壺は有段口縁のものが多い。6は第1号住居跡の例（第6図5）に比べ外反度が少なく、内面の屈曲がはっきりしている。大型の7には口縁部下側に浅い凹線が2条施される。高坏の形態は多様で、小型の8、有段の坏部を持ち、坏部上半の短い9、同じく坏部上半が非常に長く外反度の強い10と、3つのタイプがある。11は、8のように小型の坏部を持つ可能性がある。器台の12は、大きさ、形態からみて第1号住居跡の完形品と同タイプと思われる。鉢は14に示す椀形のもの1点しか出土しなかった。14はつまみ付き笠形の蓋で、他に出土した破片もこのタイプが多いが、体部が内湾するものも1例確認している。器表の調整は、甕は外面ハケ、内面ヘラナデが多いが、内外面共ハケ、或いは4のような内外面共ナデの例もある。壺外面及び口縁部内面、高坏外面及び坏部内面、器台、鉢、蓋それぞれ全面は、ヘラミガキのうえ朱彩されることが多い。高坏脚部には透し穴が設けられることがあるが、10の2個1単位の透し穴はやや特異である。第3号住居跡出土土器は、甕、壺、器台などにおいて第1号住居跡出土土器と共通点がある反面、特に高坏、鉢の器形で大きな差異が認められる。これは同時期のセットを補完するとも考えられるが、第3号住居跡のプランが他と異なることもあり、時期差として捉えられる可能性も無視できず、今後の課題である。

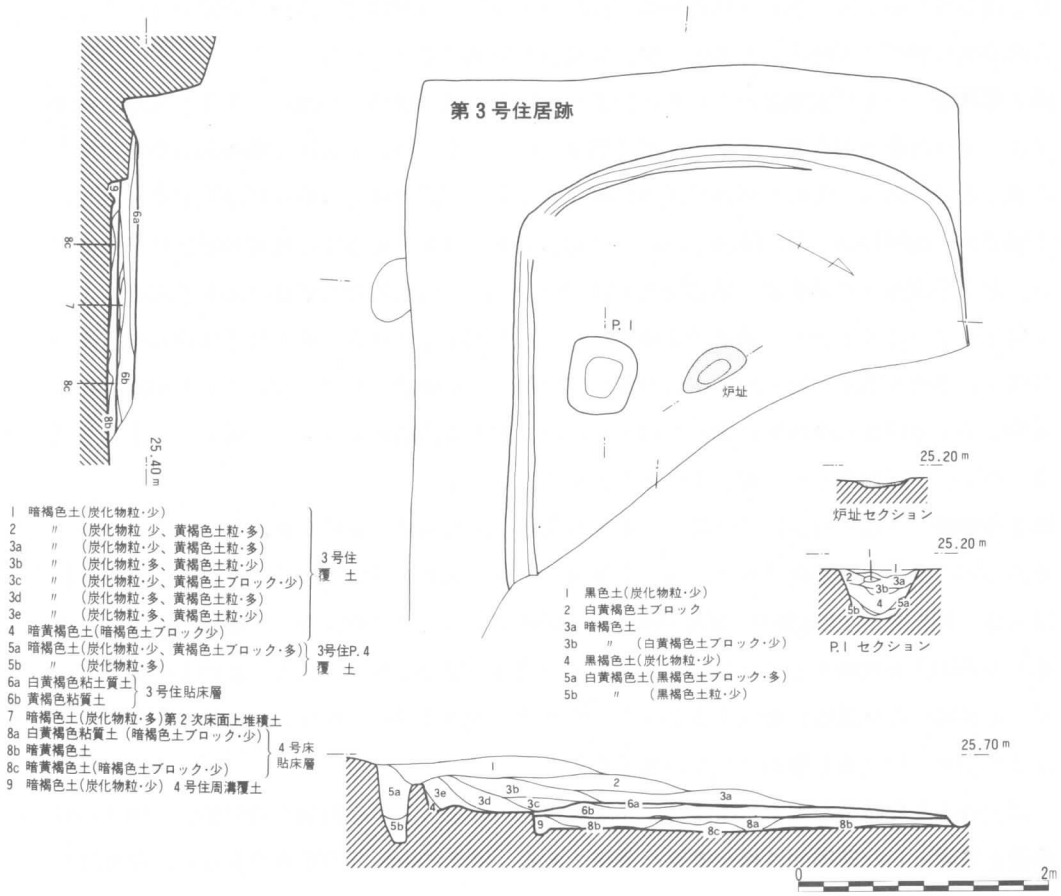
ここで各住居跡出土土器の特徴を大まかにまとめておく。①各住居跡とも、甕は「く」の字面取りタイプが主流である。②タタキ技法を持つ甕は、各住居跡で皆無に近い。③第2号住居跡出土土器は、第1・第3号住居跡出土土器に比べ古相である。④第1・第3号住居跡出土土器は時期的に若干の差を持つ可能性がある。⑤第1号住居跡出土土器出土の撚糸文を施す土器は床直上出土であり、北陸系弥生土器との共伴を示すことは確実である。



第10図　第３号住居跡出土遺物

4．第4号住居跡（図版第5図　第11図）

第4号住居跡は第3号住居跡の床下より検出された。第4号住居跡発見のきっかけは、第3号住居跡の北東側露頭の断面観察や、柱穴の断面観察などを通じて、第3号住居跡の床が貼床でないかと思われたことによる。このため、貼床の状況を把握する目的で、第3号住居跡の床をトレンチ法で発掘したところ、第3号住居跡の西辺近くで、第3号住居跡のものとは異なる周溝の一部が確認された。さらに床面を全面発掘し、第4号住居跡の床面と周溝を検出した。プランは隅丸方形で、残存する西辺の規模は約3.6ｍで、第3号住居跡より一回り小さい。周壁は第3号住居跡の新設で、こわされているが、第3号住居跡の例からするならば約70㎝以上あったと推定される。なお、第4号住居跡の内部施設は周溝・炉跡それにピットである。柱穴は第3号住居跡と共有するのであろうか。また、第3号住居跡の建設は第4号住居跡が手狭になったために建て替えたものと思われるが、第4号住居跡の床面と第3号住居跡の貼床面との間に、もう1面ある床面の解釈についてはこれからの課題としたい。



第11図　第4号住居跡実測図

5．環　濠（図版第7・8図　第12～17図）

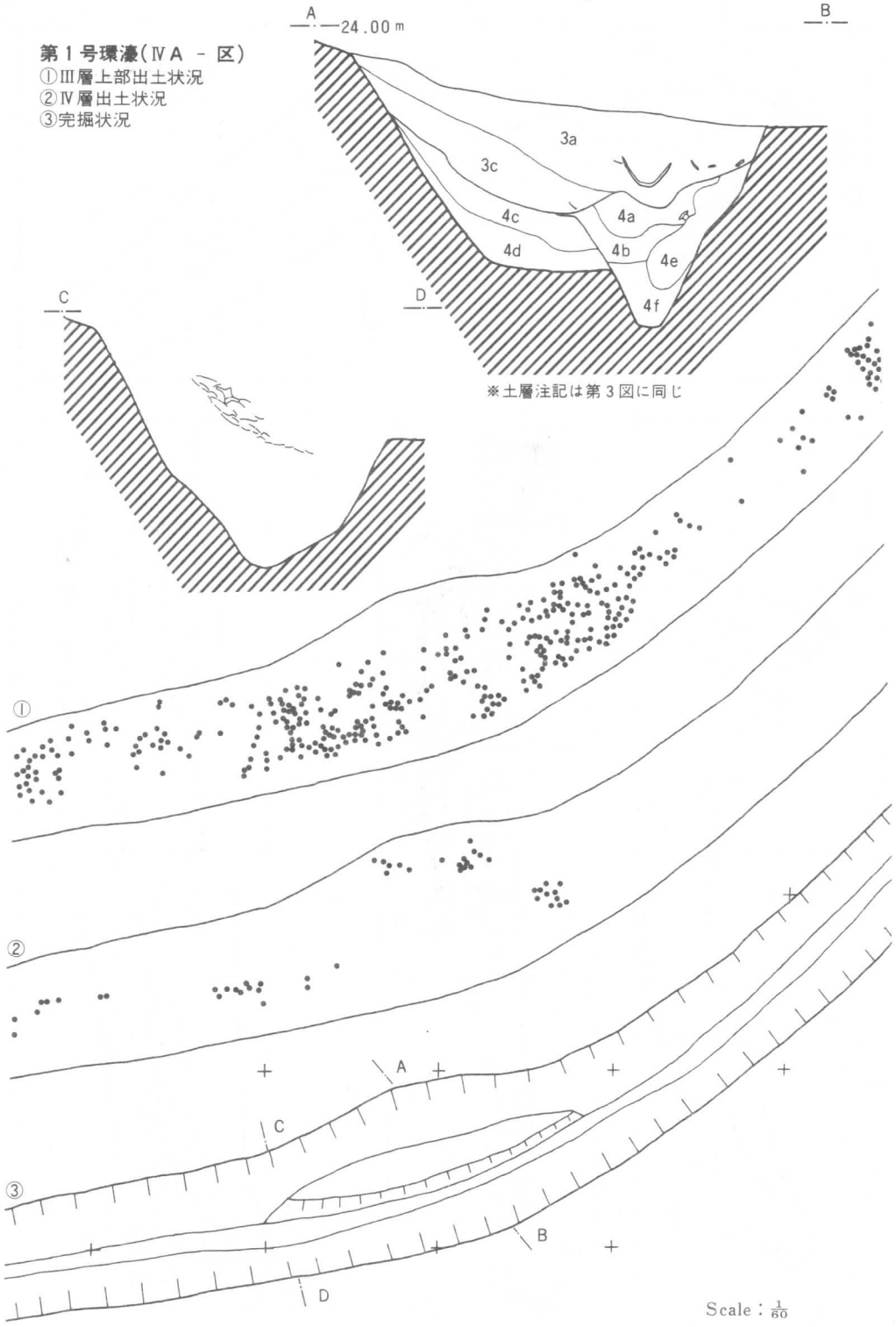
本調査では、前述の住居跡群を取り囲む形で計3本の環濠が確認されている（第4図）。

第1号環濠　ⅡA区北西部～ⅣA区南西部（約48m）から削平部を介在させてⅤB東部（約12m）に連続する。断面形はV字形を呈し、上幅200cm・底幅30cm・深さ100cmを測るが、形状は地点によって若干異なっている。ⅣA区南部ではV字溝構築以前に逆台形の溝が存在していた痕跡を残している（第12図A－B・14図O－P）。逆台形溝はV字溝に比べ小規模で、深度は90cm程度である。濠内の覆土は上層のⅢ層と下層のⅣ層に大別される。Ⅳ層には地山粒の混入が多く、遺物の出土量は僅少であったが、土塁の痕跡を示唆するブロック状の崩落土（4d層）が認められた。一方、Ⅲ層はⅣ層堆積後、比較的短期間に多量の土砂が流入した様相を帯びている。Ⅲ層上部では夥しい量で遺物が出土し（第12図①）、特にⅢA～ⅣA区の完形品の出土状況からは局地的な廃棄の可能性も否めない。この状況に対し、ⅤB区では遺物の出土は少量にとどまった。環濠に付属する施設としては、居住区域側に深さ50cm程の半月状のテラスが形成されている個所（第13図④・14図M－N）があり、入口に関連する部分と推定される。その他ⅡA区北西部で検出された小ピット群はその区域の環濠が浅いことから部分的な柵列の可能性もあるが、他には杭痕の遺構は認められなかった。

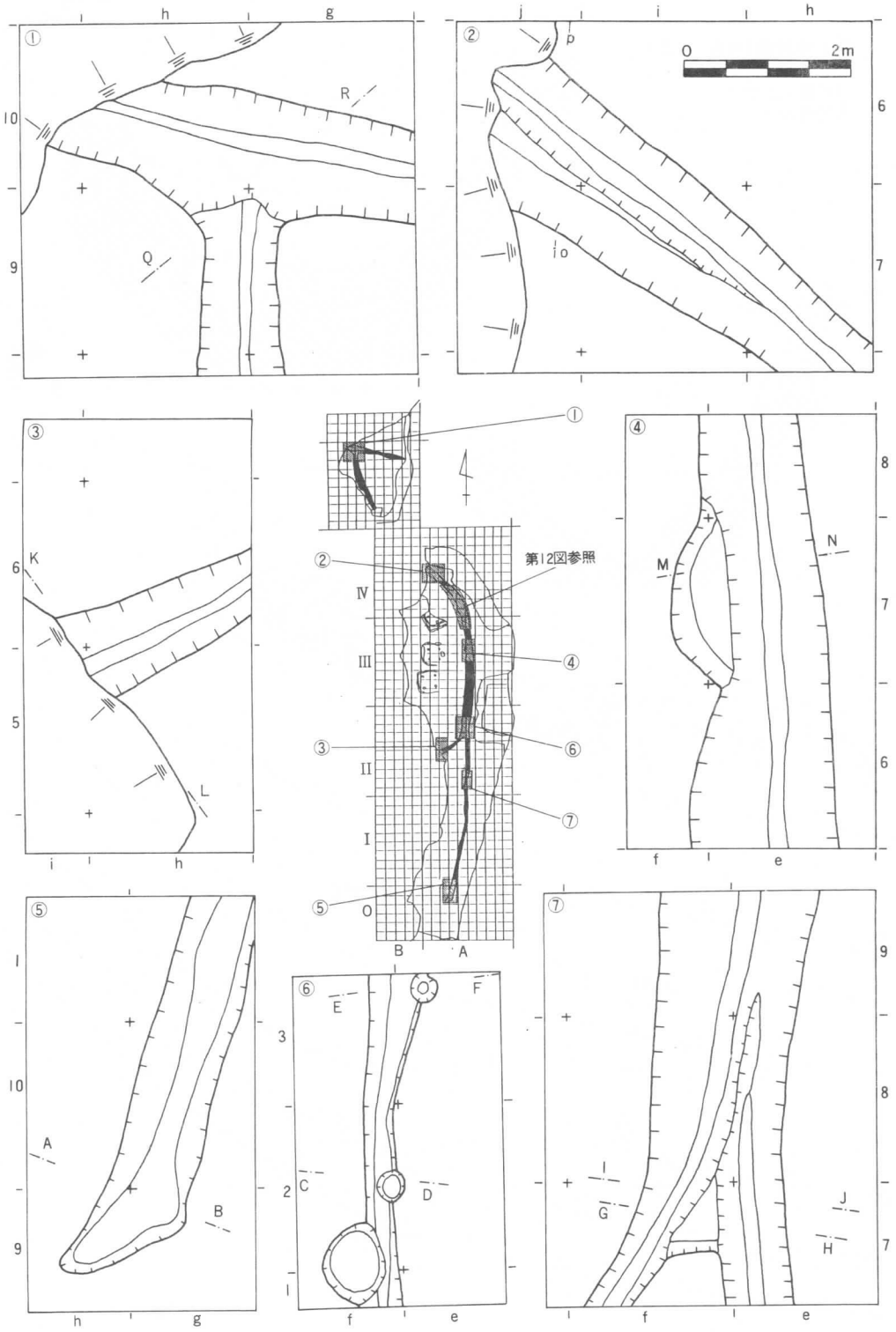
第2号環濠　OA区南端部からⅡA北西部へほぼ直線状に延び（約38m）、第1号環濠に接続する。遺存状態は不良で、上部の大半は削平されている。特にⅠA区は溝底部の痕跡が僅かに残るだけである。比較的残存状況の良好なⅡA 1～7区の場合、断面形はV字形を示し、上幅80cm・底幅10cm・深さ60cmを測る。終結部であるOA区南端では底部形態はU字形に近い。第1号環濠との接合部（第13図⑦・14図I－J）にみられる新旧関係は第1号環濠によって切られていることから、第2号環濠が古いことを明示している。第1号環濠内に残る逆台形溝への連続が想定されるが、逆台形溝が部分的にしか確認されていないため不明瞭である。遺物は第1号環濠同様Ⅲ層に偏って出土したが、出土量は極めて少ない。従って、第2号環濠自体が居住域の中心から離れていたことが考えられる。

第3号環濠　ⅤB区南端部に位置し、第1号環濠にほぼ直交する形で検出された（約12m）。東西方向に延び、東端部で徐々に浅くなり消失する。第1号環濠との接合部付近（第13図①・14図Q－R）で、上幅120cm・底幅20cm・深さ60cmである。その切り合い土層は不明瞭で、構築の先後関係を判断することは難しい。第1号環濠と同時に造営された可能性も指摘されるが、交叉部から東端部に走向する部分には防御的な機能は認められない。遺物は細片がほとんどで、その出土量も極めて少ない状況であった。

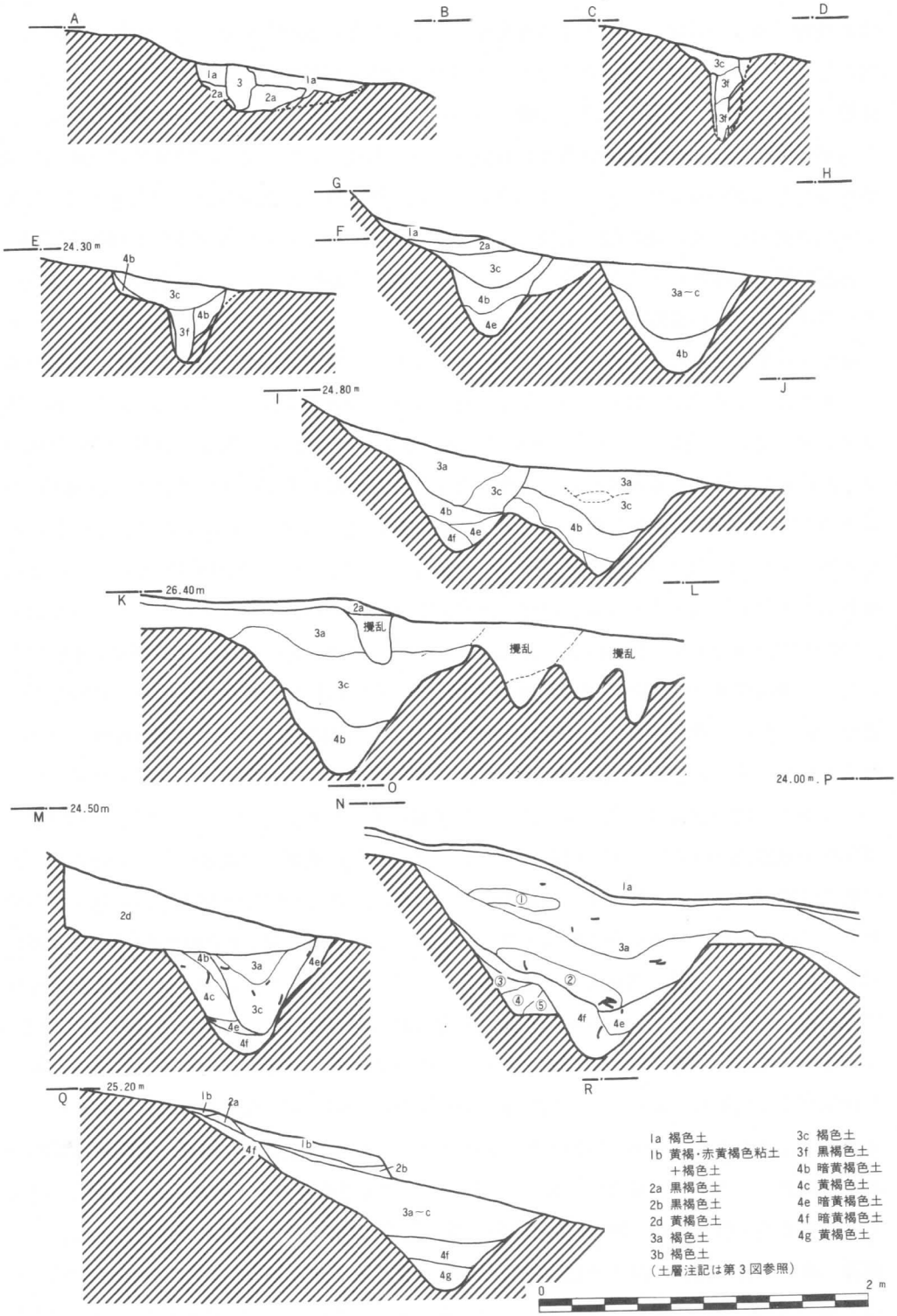
以上のような特徴を有する環濠は、丘陵縁辺部から立ち上がる斜面を効果的に利用する構築法を基礎とした防御的性格が濃厚な遺構である。残丘部分からの推測であるが、環濠は丘陵全体を取り囲んでいたと考えられよう。



第12図　環濠内遺物出土状況図



第13図　環濠部分実測図



第14図　環濠土層断面図

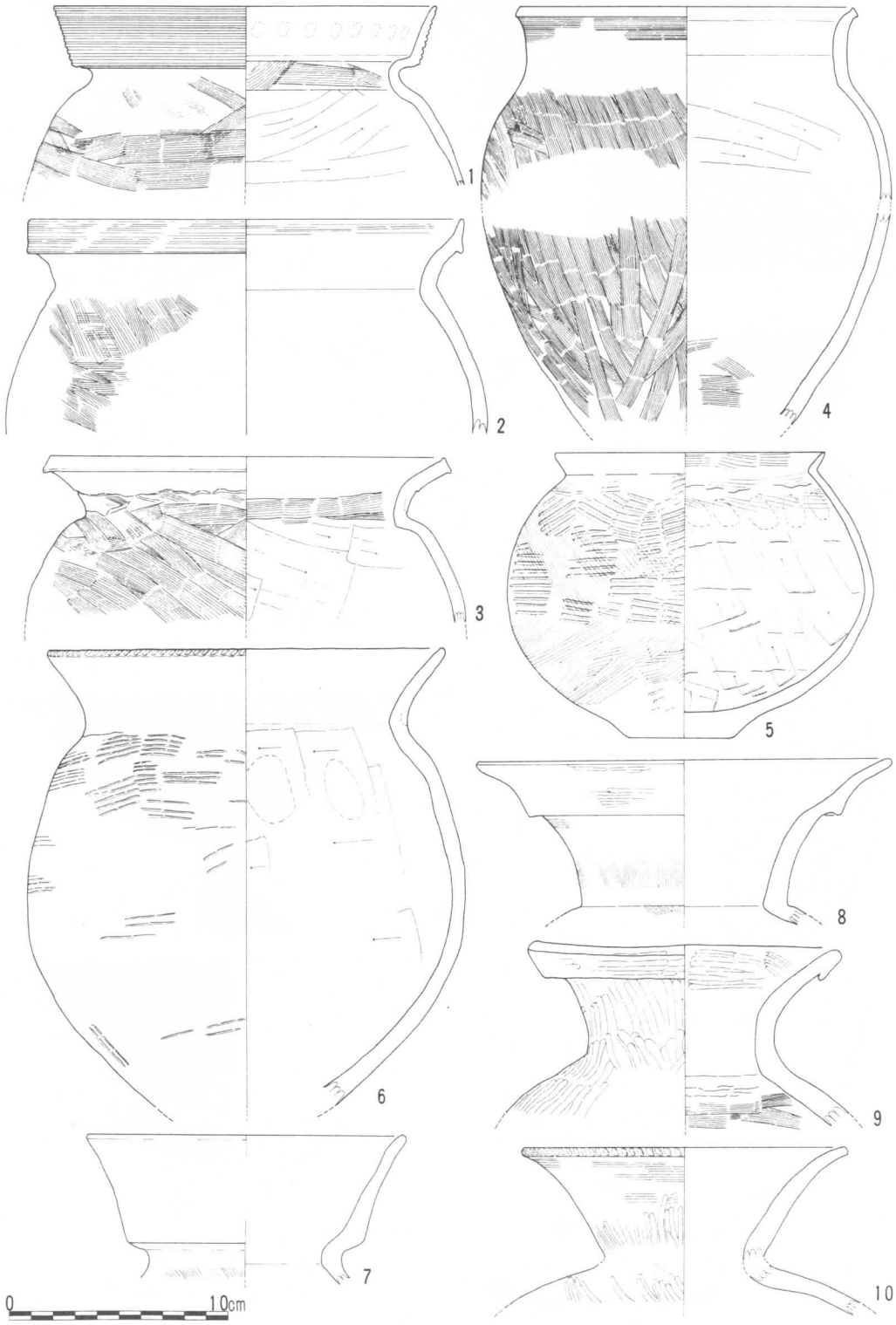
出土遺物（第15～17図）　第１号環濠を中心に膨大な量の遺物が出土した。紙数の都合上、図示した資料は極一部に限られるため、主体的な特徴を記載するにとどめておく。

土器（第15・16図、17図１～17）　**甕**　形態には多彩なヴァリエーションが認められるが、口縁部の形態差により①擬凹線有段口縁甕・②無文有段口縁甕・③「く」の字単口縁甕に大別される。①は擬凹線文のほか、口縁部内面の連続指頭圧痕、内面頸部以下のヘラケズリ技法など北陸地方月影式の諸特徴を具現しているが（15-1）、出土量は甕全体の１割以下である。口縁部の幅に個体差のみられる②（15-2）も、出土量は２割程度と少ない。甕の中で主体をなすものは③で、a.口縁端部に外傾する面を有するもの（15-3・4）、b.口縁端部が丸縁あるいはつまみ出しによって尖るもの（15-5・6）がある。調整は口縁部内外面ナデ、胴部外面ハケ・内面ヘラナデが一般的だが、aの形態の場合、口唇部刻目・タタキの技法と密接な関連性を示している（15-5）。また、タタキの甕は第１号環濠に多く、第２・３号環濠には極少量しか伴わない傾向が指摘される。　**壺**　有段口縁壺が最も多く出土しており、口縁部が外傾する16-7のタイプがその典型例である。口縁部が狭少で外反するもの（15-8）や口縁部下端に擬凹線の施されるもの（16-1）が少量みられるほか、段を形成しない「く」の字口縁壺も存在する。折り返し口縁（15-9）は系譜を異にする特殊な存在といえよう。小型品の大半は有段口縁であり（16-4・5）、丸底に近い形態を呈するものが多い。長頸壺は量的にも少なく詳細は不明だが、図示した例（16-2・3）は小有段口縁で、胴部が横に広がる形態である。

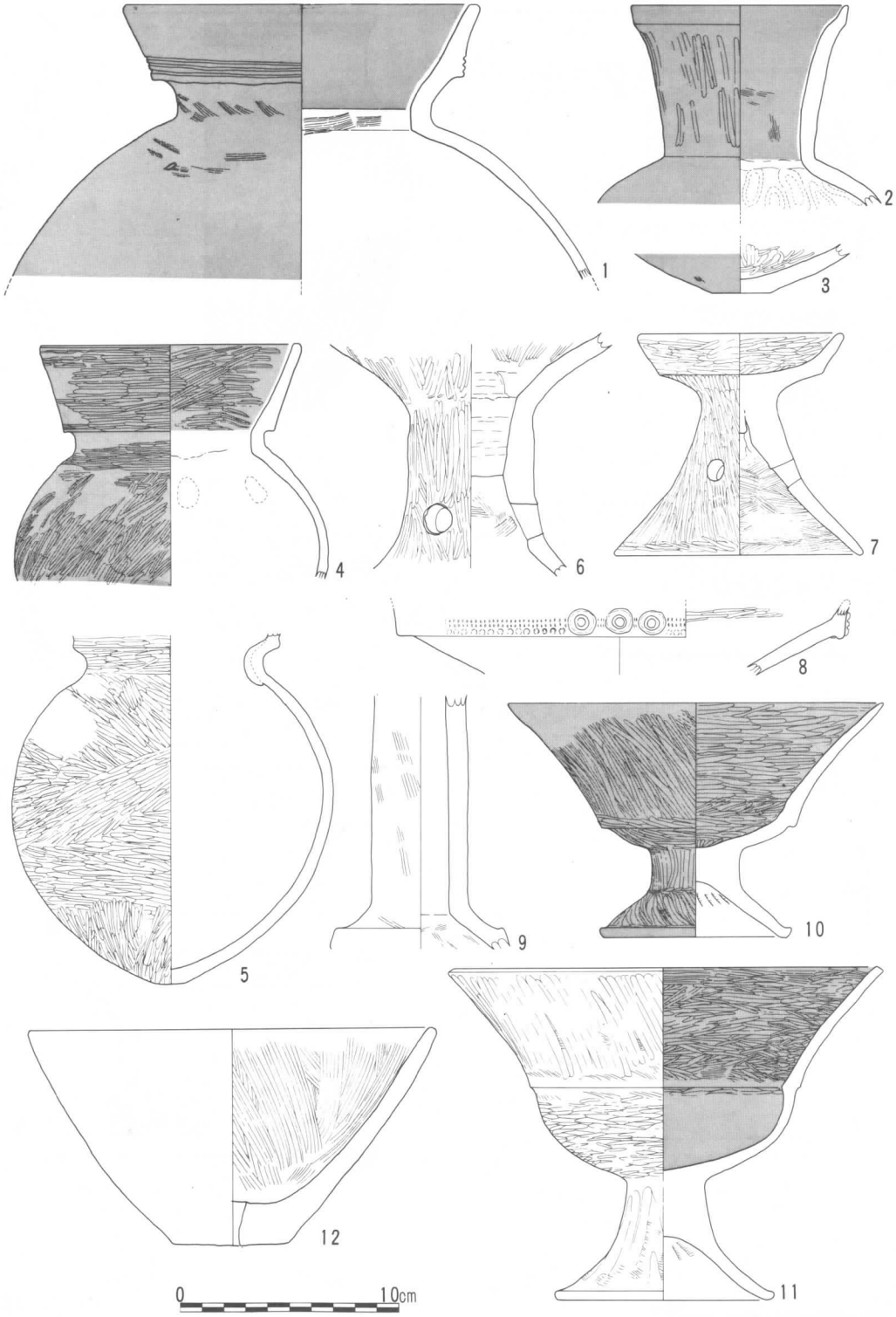
器台　まとまった資料が少なく、実態は不明瞭であるが、主体的なものは第１号住居跡で出土したタイプ（6-8）と想定される。図示した例は非主体的なタイプであり、受部・脚部がラッパ状に開く大型の器台（16-6）は第２・３号環濠に限って出土している。また、小型器台（17-7）や装飾的文様を施す器台（16-8）も散見される。　**高坏**　主流は坏部が有段のもので、坏底部は内湾・口縁部は外反する（16-10・11）。口縁部の外反の程度や坏部高の多様性は時期差として捉えられる。棒状有段脚（16-9）もみられるが、極少量であり出土区も第３号環濠に限定されている。　**甑**　椀状を呈する図示したタイプ（16-12）が多いが、甕の底部を穿孔して再利用したものも出土している。　**鉢**　有段口縁のもの（17-1）と椀状のもの（17-2・3）が主体的である。　**蓋**　様々な形態のものが出土している。口縁部が内湾するもの（17-4）と体部がほぼ直線状に延びるもの（17-5）を図示した。細口壺の甕もみられる（18-6）。

その他　北陸地方の様相から逸脱する土器も出土している。主に東北南部～北関東に類例が求められよう。撚糸文・縄文の一群（17-7～11）は後期後半の十王台式・天王山式、櫛描文・沈線文の一群（17-12～16）は中期後半の竜見町式・山草荷式との関連が想起される。

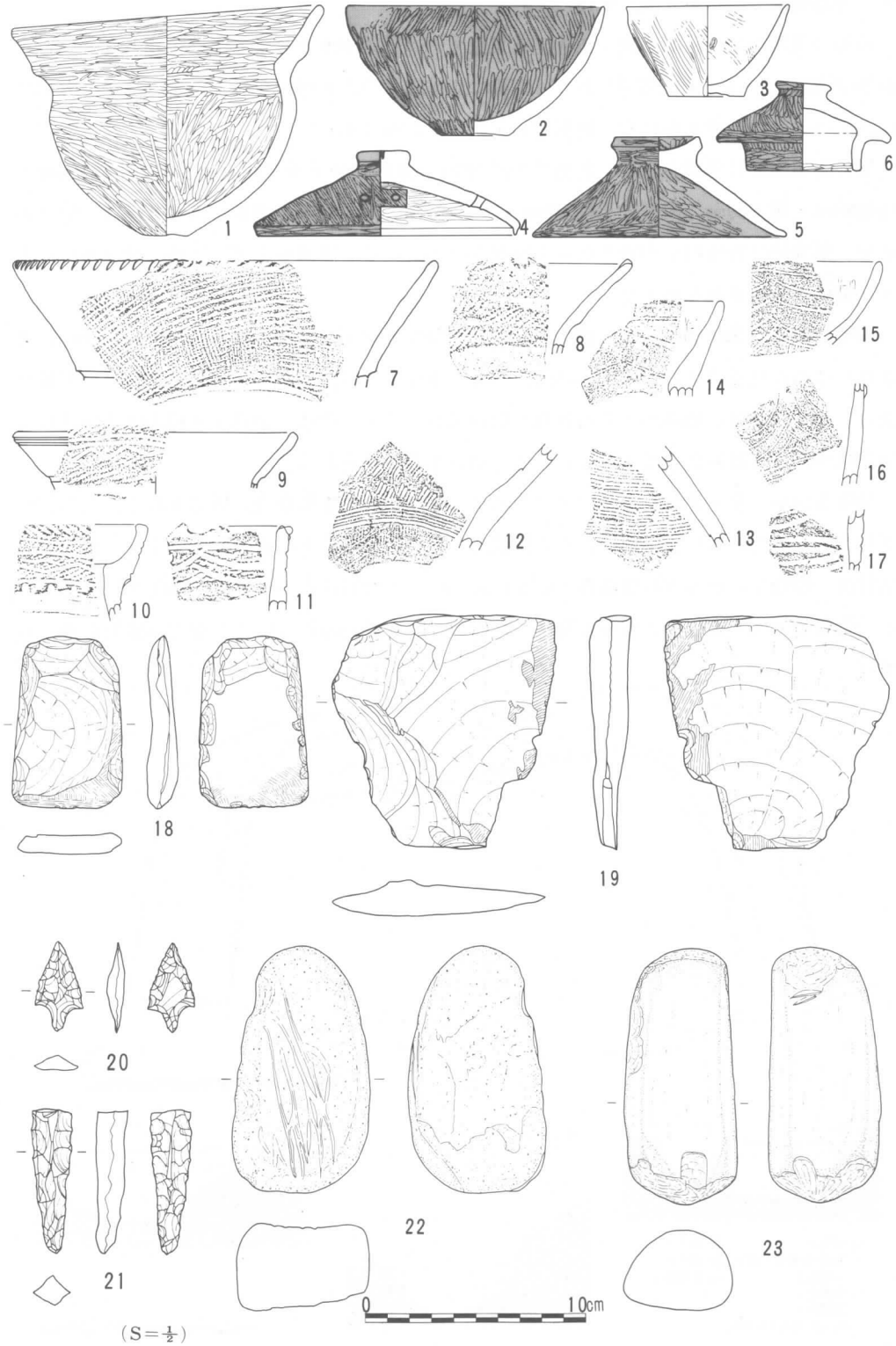
石器（第17図18～23）　出土点数は少ないが、扁平片刃石斧（18）・スクレイパー（19）・石鏃（20）・石錐（21）・砥石（22）・敲石（23）等が出土している。19は穂摘具として使用された可能性が高く、刃部にはラフな二次調整と部分的研磨が施されている。



第15図　環濠出土遺物（1）



第16図　環濠出土遺物（2）



(S＝$\frac{1}{2}$)

第17図　環濠出土遺物 (3)

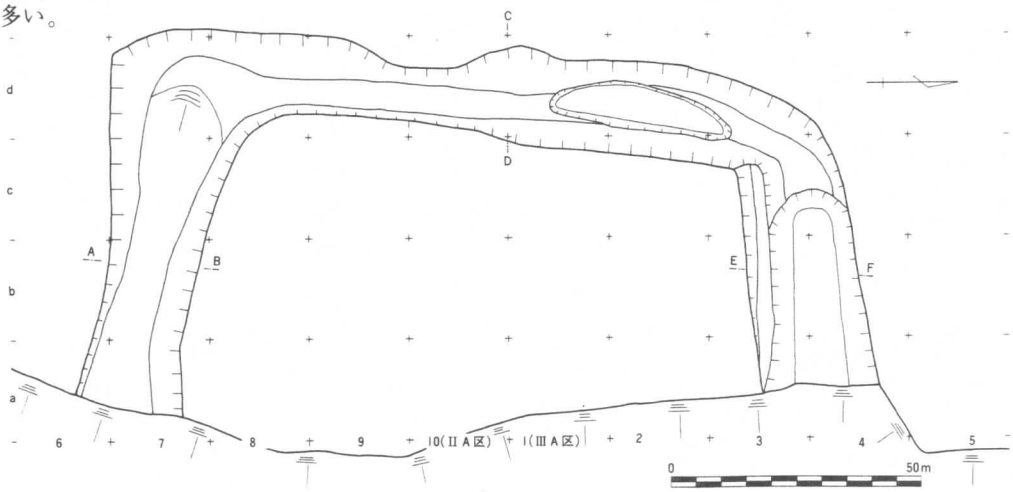
6．方形周溝（図版第８図　第18･20図）

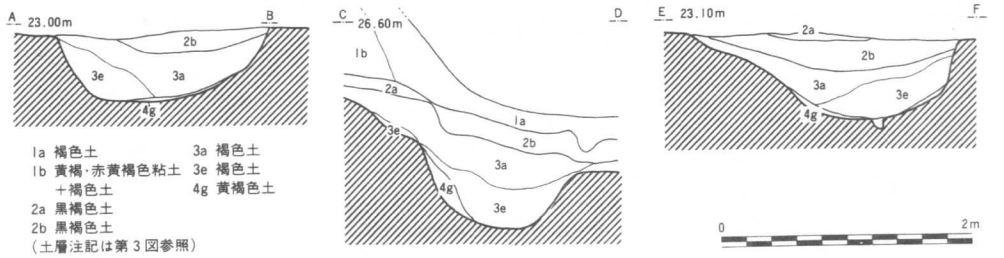
環濠の東側、ⅡＡ区北東部～ⅢＡ区南東部で「コ」の字形を呈する溝が確認されている。西側は環濠と1～1.5ｍの間隔があり、東側は畑地造営のため削平されている。本来は方形に巡っているものと考えられる。検出分の全長は約22ｍである。

溝の断面形はＵ字形を呈し、北側で上幅210㎝・底幅90㎝・深さ60㎝、西側で上幅130㎝・底幅60㎝・深さ50㎝、南側で上幅170㎝・底幅100㎝・深さ50㎝を測る。深度はほぼ一定であるが、部分的に長楕円形の掘り込みや段差が認められる。周溝中央部には特に付設されたような遺構は検出されなかった。

遺物はⅢ層（3a・3e層）から出土し、特に西側での出土が多い。ⅡＡ-10a～j北壁断面（第３図）にみられるように、環濠とほぼ同時期に多量の土砂の流入によって埋没した可能性が高い。その状況は、周溝出土の台付壺（第20図９）の同一個体片が第１号環濠ⅢＡ2e区および遺構外のⅢＡ1f区から出土していることからも裏付けられる。

堆積状況から想定される廃絶のプロセスは、本遺構が第１号環濠に併設されていたことを支持するものであるが、積極的にその機能を明らかにすることは困難といえよう。溝の形態的特徴・規模などから方形周溝墓とも捉えられるが、①傾斜は緩いが斜面に構築されていること、②埋葬主体を含む盛土部分の存在した痕跡が全く認められないことなど消極的な要素も多い。





1a 褐色土
1b 黄褐・赤黄褐色粘土＋褐色土
2a 黒褐色土
2b 黒褐色土
3a 褐色土
3e 褐色土
4g 黄褐色土
（土層注記は第３図参照）

第18図　方形周溝実測図

出土遺物（第20図）　遺物の出土総量は環濠に比較して少なく、器種による偏りも認めることができる。

出土土器（第20図１～９）　**甕**　出土量は環濠同様、最も多い。口縁部形態に着目した場合、擬凹線有段口縁は皆無であり、無文有段口縁・「く」の字単口縁が顕著である。無文有段口縁甕は口縁部幅が狭小で（20-1）、「く」の字単口縁は口縁端部に外傾面を形成する（20-3・4）傾向を窺うことができる。外傾する面を取らない丸縁は少なく、環濠とは異なった状況を示している。タタキ手法の甕は１、２個体程度の小破片が出土しているに過ぎない。　**壺**　出土点数は少なく、図示した有段口縁壺（20-2）の形態にほぼ限定される。有段部の幅が狭く、環濠で主流のタイプ(15-7)とは異なっている。　**高坏**　壺同様出土量は極めて少ない。20-6は口縁部・坏底部が外反し、有段ではあるが内面に稜を形成しない例である。脚部は棒状に延びた後広がるが、外反しながら大きく広がるもの（20-7）も出土している。一方、器台は皆無に等しい状況であった。　**鉢**　「く」の字口縁の小型品が出土している(20-5)。器内外面とも微細なヘラミガキが施されている。　**小型粗製土器**　内面にランダムな指頭圧痕を残す手慌ね土器（20-8）。図示した一点のみ出土した。　**台付壺**　胴部が偏平な台付壺（20-9）で、中央部に凸帯が付加され、５条の擬凹線文が巡っている。

石器　剥片石器類は出土せず、磨製石斧（20-10）のほか、砥石が目立つ程度である。

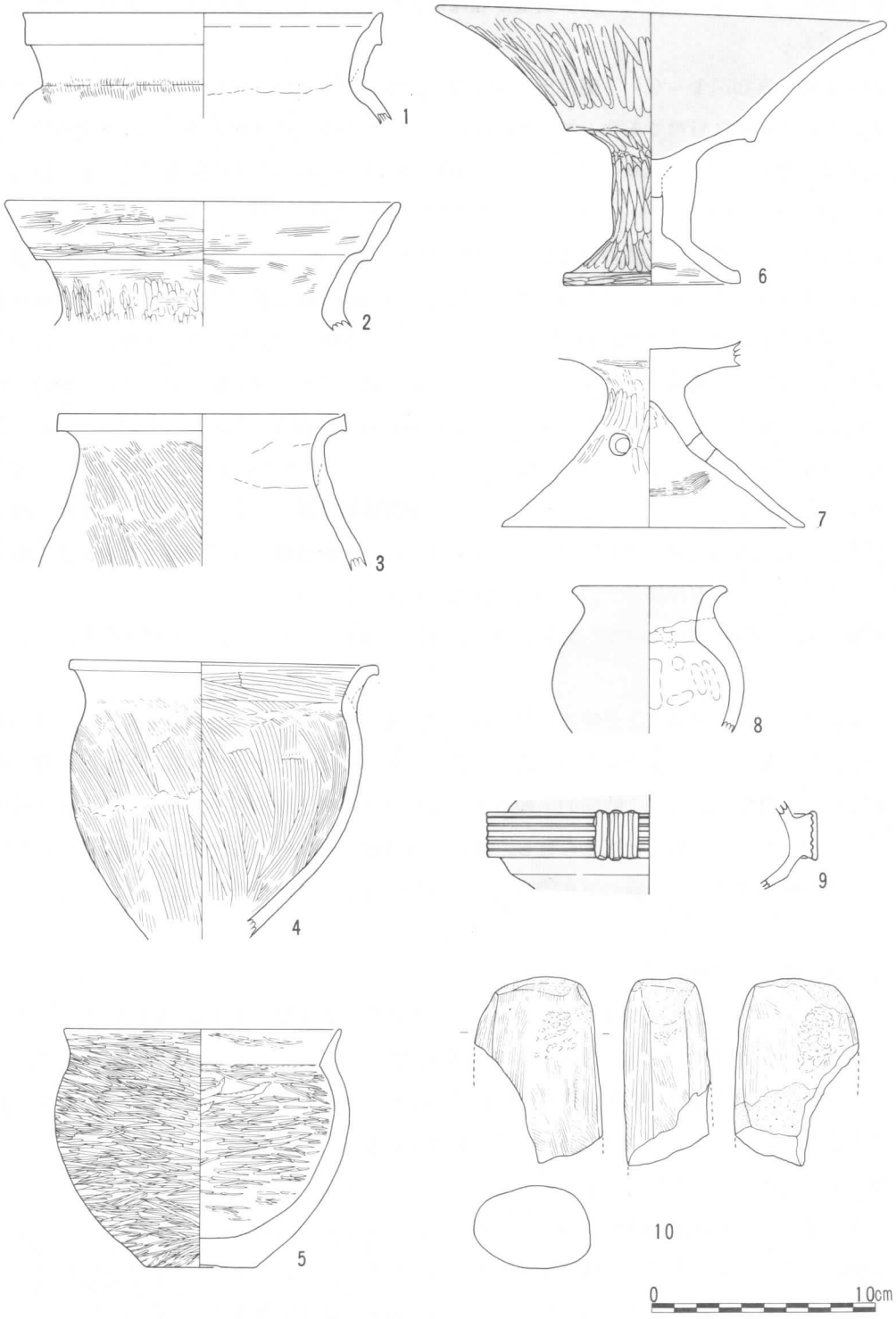
最後に、環濠・周溝出土遺物の様相を概括的にまとめるならば、①環濠・周溝出土遺物の大半は住居跡側からの流れ込みの可能性が高く、その大部分は土器である。②出土土器の様相は住居跡群とは異なり、時期的・地域的にもかなりの幅を有するが、その主体は弥生時代後期末（月影式並行期）と捉えられる。③石器の総量が少ないことは、住居跡同様鉄片も出土している事実から、鉄器の恒常的利用を想起させる、などが指摘されよう。

７．土　坑（その他）

ＩＡ区７hおよびＶＢ区１dで土坑が確認されている（第４図）。ＩＡ区７hの土坑は円形で、直径100㎝・深さ30㎝を測る。覆土中に多量の炭化物を含んでいたが、その性格は不明である。逆三角形を描出する磨消縄文土器（第19図）のほか、少量の土器片が出土した。ＶＢ区１dの土坑は長方形のプランで、長軸90㎝・深さ40㎝を測る。
極少量の土器片が出土したにとどまった。

その他、ＩＡ区第２号環濠東側に井戸跡・溝跡・小ピットの存在が認められる。いずれの場合も珠洲焼片が出土していることから、中世以降に何らかの遺構が存在していたことは確かである。第２号環濠の遺存状態が悪い一因とも考えられる。

第19図　土坑出土土器



第20図　方形周溝出土遺物

土器観察表

第7図　1号住　出土土器

No.	器種	法量(cm)	出土層位	手法の特徴	胎土	色調	焼成	備考
2	甕	口径15.5	床直	口縁部外内ヨコナデ。頸部外斜ハケ内ハケ。体部外斜ハケ、ヨコハケ内ハケ、ヘラナデ。	～1mm鉱粒多	明橙褐色	良好	外黒斑あり 3と同一個体
3	甕	底径3.0	床直	外ヘラケズリ→ハケ。内ヘラナデ。	～1mm鉱粒多	暗橙褐色	良好	外黒斑多
4	甕	口径推17.0	第II層	口縁部～頸部外内ヨコ、斜ハケ→ヨコナデ。	～1mm鉱粒多	暗橙褐色	普通	外炭化物付着
5	壺	口径推13.0	Pit2 下層	外内磨滅著しい。口縁部外内ヘラミガキ？頸部外ヨコナデ内ヨコハケ。外朱彩。	～1mm鉱粒多	明橙褐色	普通	
6	壺	口径18.8	床直	外内磨滅著しい。口縁部外内ヘラミガキ。頸部外ヨコナデ内ナデ？外内朱彩。	～5mm鉱粒多	明黄褐色	普通	
7	高坏	器高11.9 口径16.5 脚径8.3	床着	外磨滅著しく観察不可、坏部ヘラミガキ？坏部内ヘラミガキ。脚部内ヨコナデ、シボリ目あり。坏部全面及び脚部外朱彩。	～1mm鉱粒多	明橙褐色	良好	
8	器台	器高11.9 口径22.3 脚径10.3	床着	外内磨滅著しい。外全面ヘラミガキ？　器受部内ヘラミガキ？脚部内ヨコナデ、シボリ目残る。全面朱彩。	～1mm鉱粒少	明赤褐色	良好	
9	蓋	つまみ径2.5	第II層	外ヘラミガキ?内ナデ？外朱彩内朱彩？	～1mm鉱粒少	明橙褐色	良好	外黒斑あり
10	蓋	器高 3.3 つまみ径2.3 裾径推8.0	第II層	外ヨコナデ→ヘラミガキ？内ナデ？透し穴あり(数不明)外朱彩内朱彩？	～1mm鉱粒少	明赤褐色	良好	内黒斑あり
11	甕？		床直	外R撚糸文(斜位)。内ヨコナデ。	～2mm鉱粒少	暗黒褐色	良好	外口唇・頸部刻目
12	鉢	口径推14.2	？	外内ヨコハケ→ヨコナデ。	～2mm鉱粒多	明橙褐色	極良	内接合痕あり
13	鉢	底径 2.5	床直	外斜ハケ→ナデ。内タテヘラナデ。	～2mm鉱粒多	明橙褐色	極良	12と同一個体
14	鉢	口径12.3	第II層	口縁部～頸部外内ヨコナデ。体部外斜ハケ→ナデ内斜ヘラナデ。	～1mm鉱粒多	明橙褐色	極良	外炭化物付着
15	鉢	器高 6.9 口径推8.0 底径 4.1	第II層	口縁部外内ナデ。体部外ナデ内ヨコヘラナデ、底部ナデ。	～1mm鉱粒多	暗黄褐色	普通	外内黒斑多 内接合痕あり
16	異形土器		床下	外R撚糸文(羽状)。内ナデ。	～1mm鉱粒多	明橙褐色	良好	外一部炭化物付着

第9図　2号住居跡出土土器

No.	器種	法量(cm)	出土層位	手法の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1	甕	口径推17.2	溝中	口縁部～頸部外内ヨコナデ。体部外斜ハケ内タテハケ→ナデ、指頭による凹凸顕著。	～3mm鉱粒極多	明橙褐色	良好	内接合痕あり 外炭化物付着
2	長頸壺	口径推15.0	Pit5上	口縁部～頸部外ハケ痕、ヘラミガキ内ヘラミガキ？ヨコハケ。外、頸部以上内朱彩。	～2mm鉱粒多	明橙褐色	普通	
3	長頸壺	口径推15.5	床上	口縁部外内ヨコナデ、頸部外内ハケ→ナデ。	～1mm鉱粒多	暗黒褐色	普通	外黒斑あり
4	細頸壺?	体径推16.0	床上	外ミガキ?内ヘラナデ、指頭痕、外朱彩？	～4mm鉱粒多	明橙白色	普通	内暗灰色
5	器台？	口径推18.4	溝中	外内ヘラミガキ、ハケ痕。外朱彩内朱彩？	～2mm鉱粒少	明橙白色	普通	
6	高坏？	脚径推20.0	Pit5上	外ヘラミガキ。内ヨコハケ。外朱彩。	鉱粒極少	明橙褐色	普通	

第11図　3号住居跡出土土器

No.	器種	法量(cm)	出土層位	手法の特徴	胎土	色調	焼成	備考
4	甕	口径推15.8	第II層	口縁部外内ヨコナデ。体部外内ハケ→ナデ。	～1mm鉱粒多	暗灰褐色	良好	内接合痕あり
5	甕	口径推13.4	第III層	口縁部～頸部外ヨコナデ内ヨコハケ→ヨコナデ。体部外斜ハケ内タテハケ→ナデ。	～1mm鉱粒多	明橙褐色	やや不良	内接合痕外内炭化物付着
6	壺	口径推12.0	床直	口縁部外ヘラミガキ？内ナデ。頸部外内ナデ一部ハケ痕。外朱彩？	～1mm鉱粒多	明橙褐色	良好	内接合痕あり 外黒斑あり
7	壺	口径推20.2	周溝西側	外内ヨコナデ、一部ハケ痕。浅い凹線2条。	～1mm鉱粒多	暗橙褐色	普通	内接合痕あり
8	高坏	口径推 7.8	床上	坏部外内ヘラミガキ。脚部外内ナデ。接合面にハケ痕。外、坏部内朱彩。	～3mm鉱粒多	明赤褐色	良好	朱彩下明橙褐色
9	高坏	口径18.5	第III層	外内ヘラミガキ。下半外ヨコヘラナデ。	～1mm鉱粒多	明橙褐色	良好	外内黒斑あり
10	高坏	脚径12.9	床上	外、坏部内ヘラミガキ。坏部外凹線2条、下端に刺突列。坏底部外ヘラケズリ→ヨコナデ。脚部透し穴2×3、内シボリ目、ヘラミガキ、下半ヨコナデ。外、坏部内朱彩。	～1mm鉱粒少	明赤褐色	極良	朱彩下明橙褐色
11	高坏	脚径 9.4	覆土上層	外、坏部内ヘラミガキ、朱彩。脚部内ナデ。	～2mm鉱粒多	暗橙褐色	良好	
12	器台		Pit4 覆土	外内磨滅著しい。外ヘラミガキ、一部ハケ痕。内ヨコナデ。外朱彩。	～1mm鉱粒少	暗赤褐色	良好	朱彩下黄灰色
13	鉢	器高 4.9 口径 9.8 底径 2.9	周溝覆土上層	外内斜ヘラミガキ、朱彩。	～1mm鉱粒少	明赤褐色		
14	蓋	器高 4.4 つまみ径2.2 裾径13.4	不明	外内ヘラミガキ、朱彩。	鉱粒極少	明赤褐色	良好	

第16図　環濠出土土器(1)

No.	器種	法量(cm)	出土地区	手法の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1	甕	口径15.5	I号IVA 6i	口縁部外擬凹線10条内ヨコナデ。頸部外斜ハケ→ヨコナデ内ヨコハケ。体部外ヨコハケ内ヨコヘラケズリ。	～2mm鉱粒多	明橙褐色	良好	外炭化物付着 黒斑多
2	甕	口径推14.8	I号III A-3e	口縁部～頸部外内ヨコナデ、一部ヨコハケ痕。体部外斜ハケ内ヘラナデ。	～2mm鉱粒多	赤褐色	良好	
3	甕	口径推18.0	I号III A-2f	口縁部外内ヨコナデ。頸部外内ハケ。体部外斜ハケ内ヘラナデ。	～2mm鉱粒多	赤褐色	良好	外接合痕あり
4	甕	口径推15.2	I号III A-1fg	口縁部～頸部外内ハケ→ヨコナデ。体部外タテハケ内ナデ、一部ハケ。	～1mm鉱粒多	赤褐色	良好	外炭化物付着
5	甕	器高13.1 口径12.4 底径 5.0	I号III A-6e	口縁部外ヨコナデ内ヨコハケ→ヨコナデ。体部外タタキ→斜ハケ、底部付近ナデ内ヘラナデ、肩部に指頭痕、ハケ痕。	～1mm鉱粒多	暗橙褐色	良好	内接合痕あり
6	甕	口径18.0	I号III A-6e	口縁端刻目、口縁部～頸部外内ヨコナデ。体部外タタキ→ナデ内ヘラナデ、指頭痕。	～1mm鉱粒多	暗赤褐色	良好	
7	壺	口径推14.5	I号IIIA-8e	外内磨滅著しい。ナデ？頸部外斜ハケ。	～1mm鉱粒多	橙褐色	不良	

No.	器種	法量(cm)	出土層位	手法の特徴	胎土	色調	焼成	備考
8	壺	口径推15.8	I号IVA-5h	口縁部㊥ヨコヘラミガキ㊥ヨコナデ。頸部㊥タテハケ→ヨコナデ。㊥磨滅著しく不明。口縁部㊥朱彩の痕あり。	～4mm鉱粒多	赤褐色	やや不良	
9	壺	口径13.7	I号IVA-2f	口縁部㊥㊥ヨコヘラミガキ。頸部～体部㊥タテヘラミガキ㊥ヨコナデ、ヨコハケ。	0.5mm程度鉱粒多	明褐色	良好	
10	壺	口径推14.6	I号IVA-5h	口縁端刻目。㊥タテヘラミガキ、上半のみヨコナデ、一部ハケ痕㊥ナデ。	～1mm鉱粒多	褐色	良好	

第17図　環濠出土土器(2)

No.	器種	法量(cm)	出土地区	手法の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1	壺	口径 8.2	I号IVA-6i	㊥㊥磨滅著しい。㊥ミガキ？口縁部に凹線3条、一部ハケ痕㊥ナデ、頸部ハケ痕。㊥、口縁部㊥朱彩。	鉱粒極少	明橙褐色	良好	㊥肩部にモミ痕あり
2	長頸壺	口径推9.8	2号IIA-6e	口縁部㊥㊥ナデ。頸部～体部㊥ヘラミガキ㊥ナデ、肩部指頭痕。㊥、口縁部㊥朱彩。	～1mm鉱粒多	明橙褐色	良好	3と同一個体
3	底部	底径 2.6	2号IIA-6e	㊥㊥ヘラミガキ。㊥朱彩。	～1mm鉱粒多	明橙褐色	良好	2と同一個体
4	壺	口径11.4	I号IVA-2ef	口縁部㊥㊥ヘラミガキ。頸部～体部㊥ヘラミガキ㊥ヨコナデ、肩部指頭痕。㊥及び口縁部㊥朱彩。	0.5mm程度鉱粒少	赤色	良好	㊥接合痕
5	壺	体部最大径14.7	I号IIIA-2e	㊥ヘラミガキ㊥ヘラナデ。	0.5mm程度鉱粒少	暗橙褐色	良好	
6	器台		3号VB-10h	㊥ヘラミガキ㊥器受部ヘラミガキ、筒状部ヨコナデ、脚部ハケ。透し穴3。	～1mm鉱粒多	明橙褐色	良好	
7	器台	器高10.1 口径 9.4 脚径11.3	I号IVA-1f	㊥ヘラミガキ㊥杯部ヘラミガキ、脚部ハケ一部ナデ。透し穴3。	～1mm鉱粒多	明黄褐色	良好	
8	器台		I号IIIA-3e	㊥㊥ヘラミガキ→口縁部㊥押引刺突及び円形竹管状刺突、円形浮文。	～1mm鉱粒多	赤褐色	不良	
9	高坏	脚径推 8.2	I号VA-10g	㊥㊥磨滅著しい。ハケ痕わずかに残る。	～5mm鉱粒多	明橙褐色	やや不良	
10	高坏	器高10.7 口径17.2 脚径 8.7	I号IIIA-8e	㊥ヘラミガキ、一部ハケ痕。㊥坏部ヘラミガキ、脚部ヨコハケ→ヨコナデ。㊥坏部㊥朱彩。	～1mm鉱粒少	白黄褐色	良好	
11	高坏	器高15.1 口径19.3 脚径10.1	I号IIIA-6e	㊥ヘラミガキ、一部ハケ痕。㊥坏部ヘラミガキ。(下半磨滅)、脚部ヨコハケ→ヨコナデ。坏部内面朱彩。	～1mm鉱粒多	明橙褐色	良好	
12	甑	器高10.0 口径18.4 底径 5.3	I号IV-2ef	㊥ナデ。㊥ハケ状工具による調整痕。底面に通気孔1。	～2mm鉱粒多	明橙褐色	普通	

第18図　環濠出土土器(3)

No.	器種	法量(cm)	出土地区	手法の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1	鉢	器高10.5 口径14.3 底径 2.2	I号IIA-9ef	㊥㊥ヘラミガキ、朱彩。体部㊥朱による放射状彩文。	～1mm鉱粒多	赤褐色	良好	
2	鉢	器高 5.9 口径11.8 底径 3.1	遺構外 IIIA-4i	㊥㊥タテヘラミガキ、朱彩。	鉱粒極少	赤褐色	良好	
3	鉢	器高 4.1 口径 7.4 底径 3.5	I号III-4e	㊥斜ハケ→口縁部ヨコナデ。㊥斜ハケ→ナデ。	～1mm鉱粒少	黒褐色	良好	㊥モミ痕あり
4	蓋	器高 3.8 つまみ径2.4 裾径12.6	遺構外 IIIA-1i	㊥㊥ヘラミガキ、下端㊥ヨコナデ。通気孔2、㊥朱彩。	～1mm鉱粒少	赤褐色	良好	
5	蓋	器高 4.5 つまみ径3.8 裾径11.6	I号IIA-8f	㊥㊥ヘラミガキ、朱彩。	鉱粒極少	赤褐色	良好	
6	蓋	器高4.0 つまみ径2.5 裾径8.02 かえり径5.2	I号IVA-5i	㊥ヘラミガキ㊥ヨコナデ、下端のみヘラミガキ。㊥上半朱彩。	鉱粒極少	橙褐色	良好	

第21図　方形周溝出土土器

No.	器種	法量(cm)	出土地区	手法の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1	甕	口径推16.1	IIIA－1d	口縁部～頸部㊥㊥ヨコナデ。体部㊥タテハケヨコナデ。㊥ヘラナデ。	～2mm鉱粒多	黒褐色	不良	㊥接合痕あり
2	壺	口径推17.7	IIIA－2d	㊥ヘラミガキ、一部ヨコハケ痕。㊥ヨコハケ→ヨコナデ。	～2mm鉱粒多	明橙褐色	良好	
3	甕	口径推12.8	IIIA－2d	口縁部㊥㊥ヨコナデ。体部㊥斜ハケ㊥ヘラナデ。	～1mm鉱粒多	明褐色	良好	㊥接合痕あり
4	甕	口径推14.0	IIIA－1C	口縁部㊥㊥ヨコナデ。頸部㊥ヨコナデ㊥ヨコハケ。体部㊥㊥斜ハケ。	～1mm鉱粒多	暗橙褐色	やや不良	㊥㊥黒班及び炭化物付着
5	鉢	器高10.6 口径推12.5 底径 5.0	IIIA－3C	㊥㊥ヨコヘラミガキ、㊥底部付近ナデ	～1mm鉱粒少	明茶褐色	良好	㊥黒班多
6	高坏	器高12.5 口径推20.0 脚径推13.0	IIIA－1C	㊥ヘラミガキ。㊥坏部磨滅著しい。脚部ヨコハケ→ヨコナデ。㊥、㊥坏部朱彩。	～1mm鉱粒少	明赤褐色	良好	㊥接合痕あり
7	高坏	脚径13.6	IIIA－2C	㊥ヘラミガキ、一部タテハケ痕。㊥坏部磨滅、脚部ヨコハケ→ヨコナデ。透し穴3。	～1mm鉱粒多	赤褐色	良好	
8	小形粗製土器	口径推 7.0	IIIA－1d	㊥㊥ナデ。体部㊥指頭痕。㊥、口縁部㊥朱彩。	～1mm鉱粒多	明黄褐色	やや不良	㊥接合痕、㊥㊥炭化物付着
9	台付壺(？)	体径推14.8	IIIA－1d IIIA－1f集中	㊥ヘラミガキ、体部中央に突帯。さらに棒状浮文(数不明)。㊥ナデ、一部にハケ痕。	～1mm鉱粒多	明赤褐色	良好	㊥黒灰色

V. ま と め

横山遺跡は昭和60年春の試掘調査で、弥生時代後期の環濠を持つ集落と推察された遺跡で、昭和61年の夏から秋にかけて発掘調査が実施された。調査の目的に、環濠集落であることの確認とその規模、集落構造の解明、それに環濠そのものの構造解明などを挙げて調査を行い、住居跡4、環濠3、方形周溝1それに土坑1などの遺構と、これらの遺構に伴っての土器や石器などを検出した。この遺構・遺物については既にみてきたとおりであり、ここではそれらの中でも横山を特徴付ける事柄を中心にまとめてみたい。

住居跡では第3号の床下に第4号が検出されたことが特筆されることの一つであろう。住居跡についてはこの外に、第1・3号に棟持ち柱の穴と思われる柱穴が住居の外側に1基ずつあったこと、第1号の周溝付近で紅ガラが出土したこと、第2号に碧玉のフレークやチップが床面や柱穴から出土し、第2号で玉作りを行っていた可能性を示唆していること、棟持ち柱穴や第4号と重複していた第3号は、外の住居跡に比して土器の出土量が多く、中に鉄の小さい破片も混じっていたことなどが、住居跡の特徴として上げられよう。つぎに北陸の弥生後期の土器編年について、よくまとめられている谷内尾晋司氏の土器編年を使って住居跡出土土器の編年的位置付けを簡単にみてみよう。第1号では高坏の脚部に若干の問題が残るが、坏部に月影II式に類似が求められることから、この時間に編年されると思われる。また、第6図11は北関東の十王台式もしくは二ツ釜式に類似しており、北関東と北陸の土器とが横山で一つになったといえよう。第2号は長頸壺・細頸壺や大型の高坏を含む土器セットから法仏II式並行と考えられ、住居跡の中ではもっとも古い。第3号も月影II式平行かと思われるが高坏に古い要素がみられるこ

第21図　東日本における弥生後期の環濠をもつ集落分布図

とから、第1号住居跡よりは若干古いと考えられる。次に環濠出土の土器について若干触れて住居跡出土土器と比較してみよう。環濠出土土器の主体は試掘調査の概報で触れたように広義の月影式の範疇に含まれるもので、これに叩き技法の甕、東海系の土器、北関東・東北南部の土器が混在していた。環濠と住居跡一特に第1・3号とは土器に類似点が多く、営まれた時期を示唆していると思われる。だが、叩き技法の甕が住居跡にないことから若干時間的な差が感じられるが、これを以て時間差とするかは次の課題としたい。

また、本調査で最も注目されたのは、残存する遺跡範囲の中央部の東斜面を巡る環濠であろう。環濠は丘の上の住居跡を囲むように斜面を巡る第1号と、第1号から分岐して南へ延びる第2号、VBで第1号と思われる環濠と直交する第3号の3本がある。第2号環濠は第1号から分岐した濠を以て、第2号としたが、第1号内の逆台形の濠との関係は今後に残し、ここでは第2号が土層観察や出土土器などから第1号より古いと言うだけにとどめたい。なお、環濠の規模は小さいけれど、斜面の立ち上がりを利用し、かつ土塁の存在が集落側に想定されるだけに、防御としての機能を充分果していたと考えられる施設であるといえよう。

大平城跡が環濠か否かの検討が充分に為されていない現状では、この横山の環濠集落が第21図でみられるように、最北端の位置にあたることを述べて、この項を終わりたい。

参照・引用文献

大場磐雄・小出義治　1953年「千種」新潟県教育委員会

金子拓男　1981年「狐崎遺跡」「三条市史　資料編第一巻」三条市

駒井和愛・吉田章一郎　1962年「斐太」慶友社

駒形敏朗・岩崎均　1986年「横山遺跡試掘調査概報」「長岡市立科学博物館研究報告No.21」長岡市立科学博物館

坂井秀弥　1985年「越後の弥生後期についての覚書」「新潟県史研究17」新潟県

田中　靖　1985年「東山丘稜西麓採集の弥生時代後期及び古墳時代の遺物」「三条考古学研究会機関誌第3号」三条考古学研究会

戸根与八郎・関雅之他　1974年「大平城跡・二ツ塚遺跡調査報告」「埋蔵文化財緊急調査報告書第3」新潟県教育委員会

中村孝三郎　1966年「先史時代と長岡の遺跡」長岡市立科学博物館

麻柄一志　1983年「北陸の高地性集落とその評価」「富山市考古資料館紀要第2号」富山市考古資料館

谷内尾晋司　1983年「北加賀における古墳出現期の土器について」「北陸の考古学」石川考古学研究会

横山勝栄・坂井秀弥他　1983年「内越遺跡」「国道116号線 埋蔵文化財発掘調査報告書」新潟県教育委員会

遺跡遠景（東から）

遺跡近景（東から）

遺　　跡

図版第２図

１日考古学教室（第１号住居跡）

第１・２号環濠分岐点

１日考古学教室（第１号環濠）

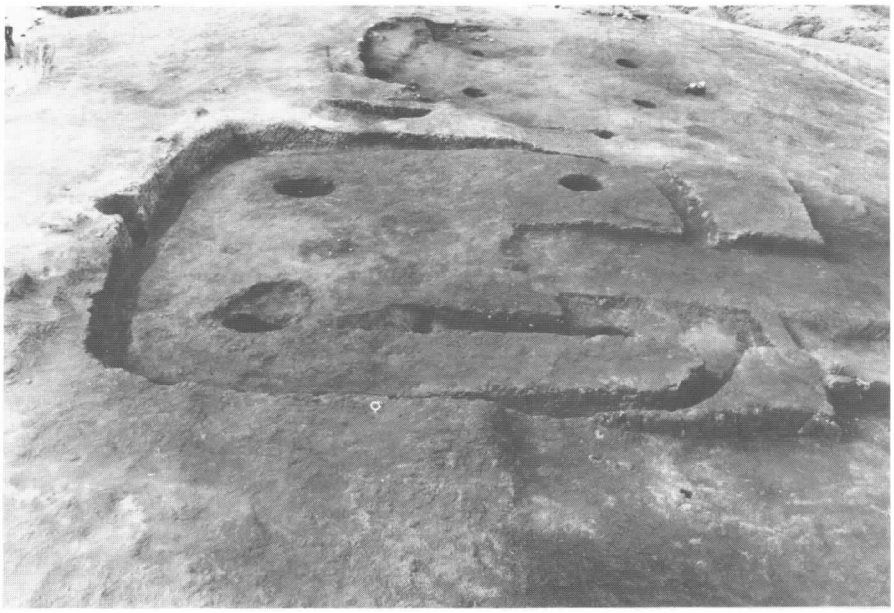
１日考古学教室（第１号環濠）

調査風景

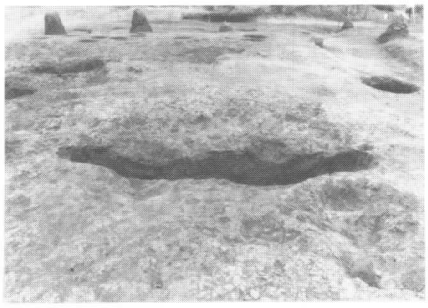
横 山 遺 跡（航空写真・市役所広報課提供）

図版第3図

図版第４図

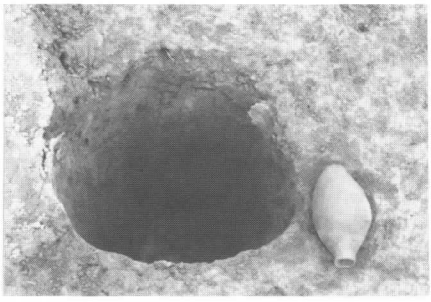


第１号住居跡（南から）



炉跡断面

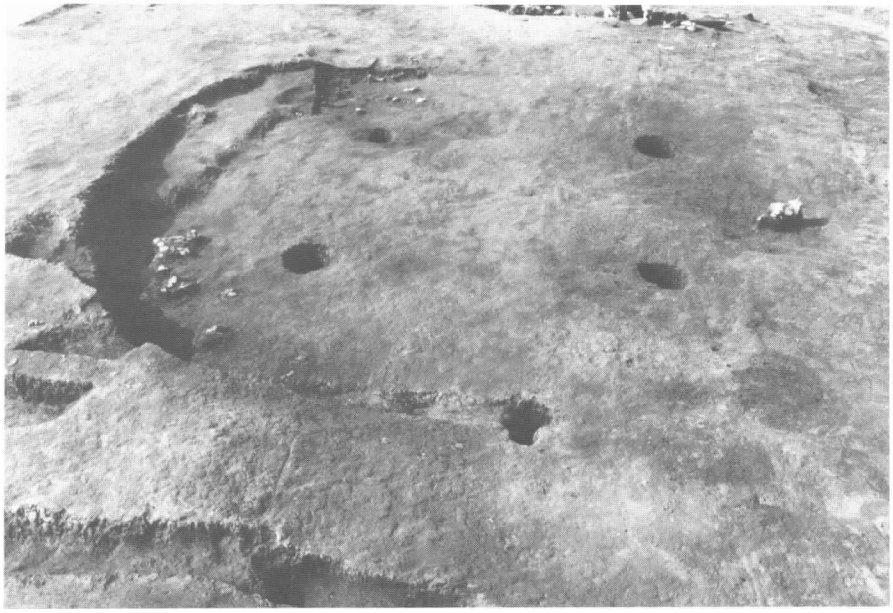
遺物出土状況



柱穴と土器出土状況

紅ガラ検出状況

第１号住居跡

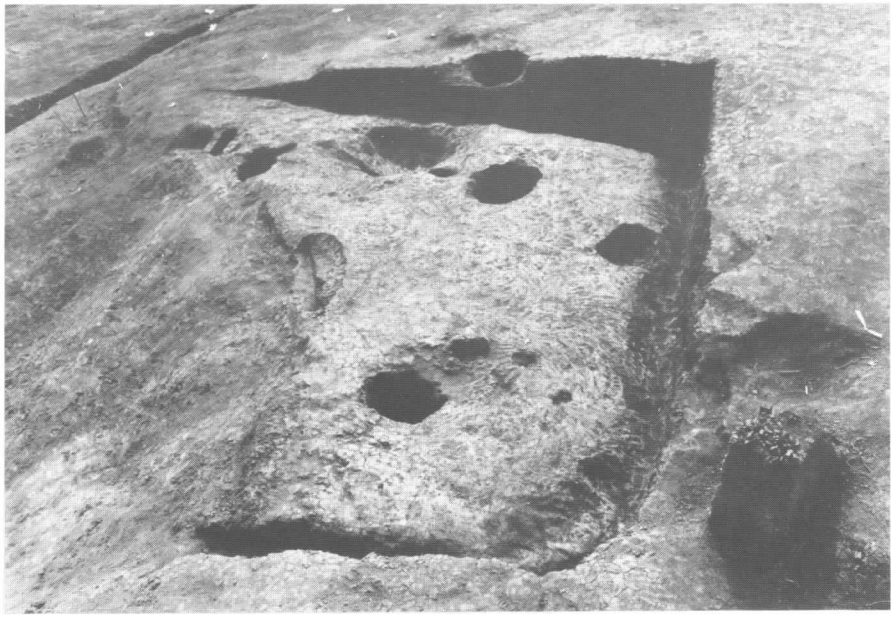


第２号住居跡（南から）

第４号住居跡（南から）

第２・４号住居跡

図版第６図

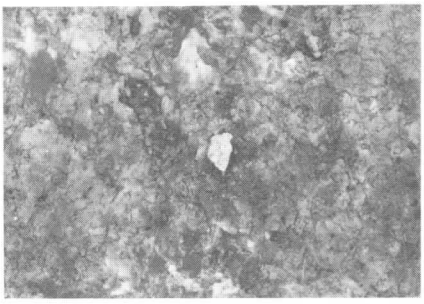


第３号住居跡（北から）

遺物出土状況

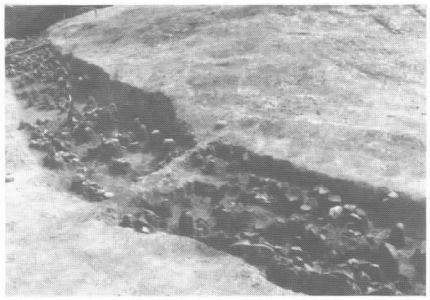
遺物出土状況

遺物出土状況

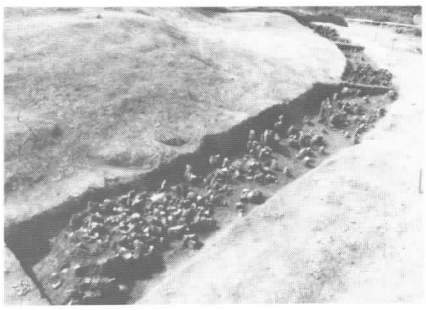


鉄片出土状況

第３号住居跡

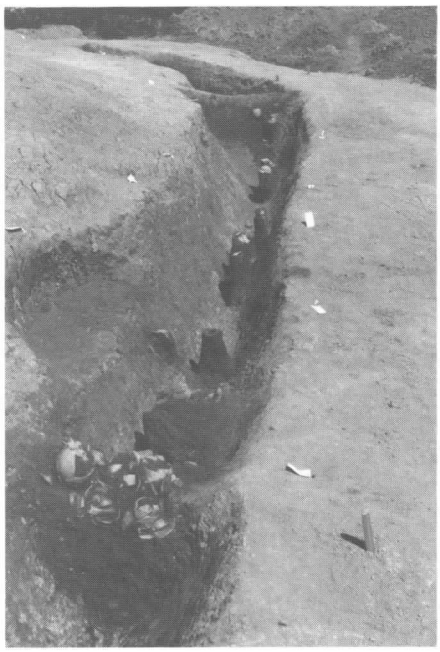


遺物出土状況（ⅢＡ）

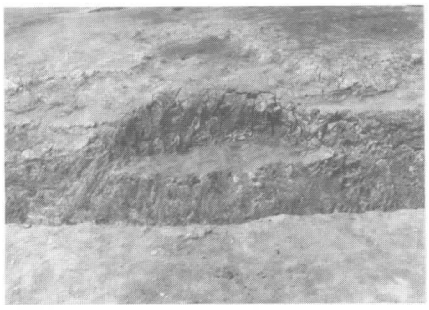


遺物出土状況（ⅣＡ）

第１号環濠（ⅣＡ）

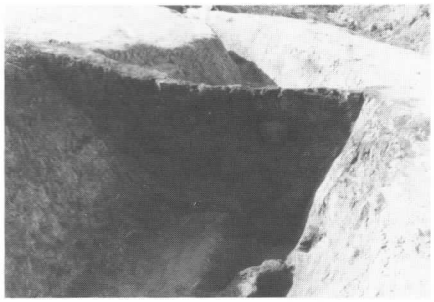


遺物出土状況（入口付近）



環濠入口部分

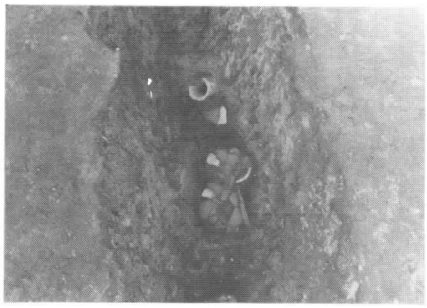
第１・２号環濠断面（ⅣＡ－6i）



第１・２号環濠断面（ⅣＡ－2e･f）

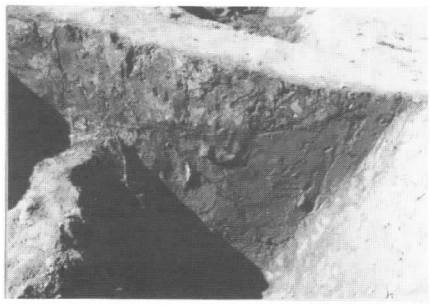
第１号環濠

図版第８図



第２号環濠遺物出土状況

第１・２号環濠分岐点



第２号環濠断面（ⅡＡ－8f）

第２号環濠立ち上がり部（？）

第３号環濠遺物出土状況（東から）

第１・３号環濠分岐点

方形周溝遺物出土状況（ⅢＡ）

第１号環濠(手前)・方形周溝(向こう側)

第２・３号環濠・方形周溝

横　山　遺　跡

昭和62年３月20日　印刷
昭和62年３月30日　発行

発行　長岡市教育委員会
印刷　総合印刷　KK 中　越
長岡市学校町３－９－５